んと思ひしなるに、お濱は其と覺らざるにや、傍に在りし下女に顏見合せ、ほゝほゝと高聲に笑ひ、下女に耳語するより早く、小走りに店へ出行きたり。

傳吉はお濱の所作面白からねど、箸の轉びしにも笑ふは娘の常情、戀なれねばと聞きしは此處か、勝之助は留守なり、定二郎此に在りなば、情らしき言葉の一つや半分は交さるべきに、殘惜や、と店の方を見れば、お濱は小僧の三吉に、何やらん細語きつゝ笑ひ居る。

下女は臺所より、澁茶一碗粗末なる茶臺に運びて、傳吉が前へ置くより、此も亦店へ走り行きて、お濱三吉と三人が聲にて、笑ふ聲のいと興ありげなり。

傳吉は手持なく茫然坐り居りしが、勝之助の歸宅遲からば、斯くてあるも其甲斐なし、我店にも用は殘りたり、如ずお濱に打明け、其取次もて勝之助へ賴ませ置かんには、空しく此處に手を束ね居るには勝らめと、思ひ定めながらも、直接にお濱を呼びかね、店口へ出で行きて、先づ三吉を呼びたり。

『傳さん、何です。ふゝゝゝ。』

『何でもないんだが、お濱さんに鳥渡。』

『お濱さんに。ふゝふゝゝ、お嬢さん〳〵、傳さんが鳥渡ですッて。ふゝふゝゝゝ。』

小僧三吉飛上りつゝ笑ひ興ずれば、お濱は知らず顏に往來を向きたり。其顏をさし覗きて、三吉はゝゝと笑立つれば、下女も同音に、ほゝおほゝゝ。

（六）

笑ふ聲のみは高く聞えて、お濱の來るべき氣勢なければ、傳吉いよゝ手持なく、柱時計を見れば四時過ぎて早や五時に近し。斯くて何時まであるべきにもあらず、二三日以來心配の餘り、店に手も付かざりしなれば、何となり居る事やらん、小僧一人にて困る位は詮なけれど、空壕の內證をお袋に見られもせば、これこそ一大事、此まで包み隱したれば、其と知りての吃驚痛心は如何ならん、請判の一條、素より捨置き難けれども、一度歸宅りて又出直し來らば、直ぐに歸ると云置きし勝之助、ゆる〳〵との面會懇談もなるべし、間違へば迷惑を掛ける一條、直接には云出し惡し、前以てお

濱に口を切らせ置きたけれど、未通氣の羞かしきにや、人前あればにや、寄付かざれば詮なし、寫眞挾も未だよこさず、しんみりとの情話もせず、情らしい言葉一つ、當面には交ざざれど、定公萬事を飲込みたれば、正可に間違のあらう筈なし、定公此に在らば、極めて好都合なれども、其も此も今云うて今の間に合ふにもあらねば詮なし、斯く物を思ふ中に、鳥渡歸りて出直し來るこそ、却つて早手廻しなれ、早歸らんと心は焦れど、お濱來りて談話すこともやと、もぢつきながら起ちかねたり。

斯くとも知らぬ店の三人、笑ふ聲は奥へ筒抜なれど、語るは忍音の中にも小僧の三吉。

『お濱さんに鳥渡と云つた顔なんざア、お鍋どん、お前の惚れさうな顔色で、實に凄いもんだぜ。いやアにいや〳〵と笑やアがつて。』

『へん、眞平御免下さいましだ。私が惚れさうな顔色だなんて、三どんお見立が恐人るよ。彼樣變目の一寸法師なんぞに、何ぼ何だッて、ねえお孃さま。』

『ほゝほゝゝ、何だか知れやアしないよ、鍋は物好だから。よか〳〵の飴屋の尻を追

掛けてあるくんだもの。ねえ三吉。』

『さうですよ、本統ですよ。そら彼蜘蛛男のよかよか、ねえお鍋どん。お前あの飴屋に惚れてるんだらう。先日彼處の横町の角で、さうだ今年のお正月だ、燒芋を買ひに行つた歸途に、彼一寸法師と何だか話をして居て、岡持の中から旨さうなのを一本、そーッと遣つてたぢやないか。僕ア怪からん事だ、一番お孃さんへ告發爲ようかと思つたんだけれども……。』

『ほゝほゝゝゝ。』

『何だッて。三どん、も一遍云つて御覽な。』

『あてられたもんだから、眞赤な顔を爲てらア。わアい〳〵。』

『何を云ふんだ。二本棒の寢小便小僧の、三太郎の嘘吐野郎め。』

『おほおほゝゝゝ。』

『一寸法師を情夫に持ちやア……。』

『いつ情夫に持つた。一寸法師や變目傳……。』

『シッ、大きな聲をお爲でないよ。鍋、もう能いぢやないかね。三吉、もうお喧嘩でないよ。』

『だッて、口惜う御在ますもの。』

『口惜きや、何とでもするが能いや。』

『爲なくッて如何するものか。』

下女怒りて小僧を捕へんとすれば、小僧は手の下を摺拔け、

『あかんべい、此處までお出で、醴酒進じよ。』

『憎いねえ。』

下女追廻れば、小僧は奥へ逃行かんとして、はたと人に突當りぬ。見れば、傳吉何時の間にやら奥と店との境に立居たり。

『おや、傳さん、えへゝゝゝ。』

小僧眞顏を爲ながら假笑をすれば、お濱はお鍋に顏見合せ、きまり惡げなり。

『傳さん、もう、お歸りなさるの。お構ひも致しませんで。』

『えゝ、いえ、なに。』

傳吉苦い顏をして店へ出づれば、お濱はお鍋と共に其間に奥へ走り入り、軈て押殺せし樣なる笑聲の聞えぬ。傳吉は奥を見返りたれども、何とも得云はで、ついと往來へ出でしかと見れば、例の如く小走りに、ちよこ〳〵。

（七）

其夜九時過ぎ十時に近き頃、仁壽堂は早や店を閉しけるが、主公勝之助尙ほ歸宅せざるにぞ、お濱は兄を待つ間の淋しく、お鍋ともぐ〳〵店へ出來りて、火鉢を中に定二郎三吉、四人手を烘しつゝ、若き者の癖とて、根なし草に花は咲きけり。

小僧の三吉の顏を見てにこ〳〵顏。

『お鍋どん、先刻は面白かつたね。』

『面白いもんかね。串戲ぢやない、覺えてお居でよ。』

お鍋が口惜げなる顏を、お濱は横からほゝほゝゝゝと打笑ふ。

『三公、如何したんだ。お鍋どん、何が其様に口惜しいんだね。お濱さん、何かあつたんですか。』

定二郎が問にお濱は笑ひながら、斯々云々なりと、傳吉が來りし晝間の始終を物語りぬ。

『はゝはゝゝゝ。其奴ア面白かつた。變目傳先生、嘸ぞ怒つたらう。』

『怒つたか、怒らないか、私と鍋は奥へ逃げたから知らないけれども、三吉が餘り大きな聲をしたもんだから。』

『はアくしよい。私ばッかしの所爲に爲て居なさらア。お鍋どんが胴滿聲を出すから不可えんだ。』

『胴滿聲だとえ。生意氣な事ばッかし。』

『ほゝゝゝ。また始めるよ。兄さんがお歸りだと不可いから、もうお止しよ。』

『三公、如何だつたい。ぷッ〳〵怒つて歸つてッたらうなア。』

『何だか沈鬱の蟲で、此樣鹽梅しきに腕組をして、ちよこ〳〵ッと駈出して。』

三吉は傳吉の身振を學び、左眼の後眦を指もて押へて、お鍋が前へ其顏をさし出す。

『またするよ、其樣眞似を。憎らしい三公だよ。』

『だッて、此目付が能いッて、お前能く恍話てるぢやないか。お濱さんに鳥渡と云つた時や、お嬢さん、丁度此樣鹽梅しき。』

今度はお濱の前に顏を出せば、

『馬鹿だよ、此子は。』

お濱平手もて三吉が頭をぽんと打つ。

『ざまア見るが能い。好い氣味だよ。お嬢さんもッと打つてお遣りなさいましよ。』

お鍋嬉しがれば、三吉又もや云はんとして眼を丸くす。

『三公、もう止さないか。其から如何した、變目公がお濱さんに逢ひたいッて。』

『えゝ。お濱さんに鳥渡此處までッて。』

『其時旦那は居なさらなかつたのか。』

『えゝ。』

『はゝはゝゝ、鳥渡あたつて見ようと云ふ洒落なんだ。』

『洒落だなんて、何だよ、定さん。』

『實はね、お濱さん、斯うなんです。』

定二郎は傳吉がお濱に戀慕せる始終をお濱へ語り聞かせぬ。おのれが傳吉を惡所へ引入れし一條を除き、其外はいと委しく、お濱より起證がはりに、寫眞挾を贈る筈に欺き置きし一事に說到りし時、お濱は戰慄しつゝ、定二郎が顏を吃と見て、

『定さん、お前さん本統に其樣事を云つたの。』

『馬鹿に爲て遣らうと思つて、面白半分に。はゝはゝゝ。』

『いやな人だよ。其樣事を。串戲ぢやないよ。まア如何爲たら能いだらうねえ。』

お濱は身を縮めて顏色を變へつ。

『はゝはゝゝ。なに何でもありや爲ませんやね。心配する事があるもんですか。』

『だッて、ねえ鍋。』

『だからで御在ますよ、お孃さまが傍に居らつしやると、何だかもぢ〳〵して、何か云ひたさうな顏をして、ねえ三どん。彼樣人は執念深いもんだッて、誰でしたッけ、さう云つてる人がありましたよ。』

『いやな事ね。』

『彼樣のが迷つて出るんだ。お孃さん恨めしいッ。どろ〳〵〳〵。』

三吉突然にお鍋が前に垂れたる手を出せば、お鍋はお濱の方に身を縮めつ。

『あれッ、いやな三どんだよ。お止しよ。氣味の惡い。』

『三吉、お止しッてば。私や氣味が惡くッて、仕樣がないよ。如何したら能いだらうね。』

お濱は怖氣立ちて、後見らるゝ心地せる折しも、店の戸をとん〳〵と叩く者あり。

四人は一齊顏見合せぬ。

『御免なさい。』

『どなたア。』

『私ですよ。』

『私ッて。傳さんの聲の樣だ。傳さんですか。』

『えゝ、淡路町の變目傳です。定さんかい。』

變目傳と聞くより、お濱は顏色變り、お鍋ともども物に追はるゝが如く奥へ逃入りぬ。

（八）

『傳さんですか。』

『傳吉です。定さん鳥渡開けて下さい。』

『へい。今開けます。鳥渡お待ちなすつて。』

お濱を始め三吉お鍋等が今夜の話の模樣にては、變目傳心持を惡くしたるは云ふ迄もなし、お濱が樣子に、われに欺かれたるを覺りて、一理窟云はんが爲め、夜中態々出來りしにはあらざるか、さあらんには、鳥渡面倒なるべけれど、誤魔化し樣なきにも

あらざるべし、兎角あたつて碎けろ、多寡が變目傳、何程の事やあらんと、定二郎は胸を据ゑ、店の耳門を開けたり。

『さアお入りなさい。大層遲いぢやありませんか。』

『えゝ、些と遲く出掛けたのです。』

傳吉は車戸の內へ顏ばかり差入れ、店の樣子を見廻し、三吉が會釋には知らず顏なり。

『旦那は、未だ歸宅んなさらないんですな。』

『へい、まだ留守ですが、まアお入りなさい。』

『旦那が御留守なら……。』

顏を退きて、少時は無言。

『定さん。』

『え。』

『鳥渡顏を貸して下さいな。』

『何か御用で。』

『鳥渡此處迄でも能いから。』

『お入んなすつたら能いでせう。』

『なに、鳥渡、内證の、その。』

『内證の。何です。』

『まア能いから、手間はとらせないから。』

『さうですか。ぢやア行きませう。三公、鳥渡頼むぜ。』

定二郎は傳吉の請にまかせて、家外へ立出でたり。月はあれども、春の癖にや朧なるに、仁壽堂が軒端の洋燈も薄靄に包まれ、光線遠くへは達かず。行人もありやなしや、醉には欲しき夜風の、素面には冷々とうそ寒し。

『定さん、つき合つて貰へようか。』

『つき合へッて、何處へです。ふゝん、解りやした。例の、北廓の、近頃の鹽梅式を、私に見せて遣らうと云ふんでせう。へゝゝゝゝ。』

傳吉がつき合へと云ひしを、定二郎はわが好める方へ早飲込し、月光に傳吉が顔をさし覗けば、常にもあらず冷笑へり。

『氣樂云つてらア。定さん、其樣話ぢやないんだ。實はね、君に聞きたい事もあるし、頼みたい事もあるんだから、何處かで鳥渡一杯遣りながら、如何だらう、付合つて貰へようか。』

何氣なき體には見ゆれど、聞きたい事、頼みたい事と、云ひし折の傳吉が聲の顫へに、怒氣滿々たるも見ゆれば、安く踏んで居る定二郎も、流石に好い心持せず。

『へい、難有いんですがね、今晩は大將も未だ歸らないし、今日本町に行つた使の返事も云はないぢやなりやせんし。其にね、實は昨夜、その、餘り遲くなつたもんだから、大きに大將の御前が不首尾なんで。實に濟みませんが、今晩の處は惡しからず……』

『能うがす。無理には頼みますまいよ。だがね、定さん、考へりや不思議だね。何時でも、否だと云つた事のないお前さんが、今晩に限つて……。まア其も能いや、ねえ

定さん。』

『どうも困りましたなア、さう感つて下さつちやア。決してさう云ふ譯ぢやないんだのに。』

『定さん、私や理窟を云ふのは嫌ひだ、また理窟も云へない。何も云へないかはりには、一度云つた事は、決して忘れないよ、聞いた事も亦忘れないよ。私がお前さんに頼んだ事があつたッけが、定さん、忘れやしまいね。』

『え、忘れやせん。お頼みなすつたてえのは。』

『寫眞挾は何時よこすんだね。もう半年から以前の事だよ。お前さんは、もう忘れなすつたらう。』

傳吉は足を止めて、定二郎が顏を見上げたりしが、堅に曲みし左眼に、月光を受けし凄じさ、定二郎は覺えず慄然として、人欲しさうに前後を見廻したり。

（九）

『へゝゝゝ。定さん、もう忘れなすつたらうね。』

傳吉は定二郎に對ひ、同じ言葉を繰返し、にやにやと笑へる顏の、月光は朧ながら、定二郎が眼には、白晝よりも尙ほ明かに見ゆ。

『其を忘れて溜るもんですか。私や今日お濱さんから、お前さんへ傳言を聞いてるんですよ、あのお濱さんから。』

『ふん、お濱さんからの傳言も久しいもんさ。』

『そりや傳さん、お前さん其樣事を云ひなすつちやア、お濱さんが可哀想ですぜ。今日私が本町から歸ると、お濱さんが可哀想に、私を見てほろ〳〵と……。』

『ふゝん。成程、また定さんの十八番だ。』

傳吉は冷笑しつゝ、顏を背向けて月光を仰ぎ見る。定二郎も密かに冷笑ひて、

『傳さん、謔なら謔になさるが能うがす。私や謔言家で能い。謔言家なら謔言家になりやせうさ。ですがね、聞いただけの傳言は云はなくッちやア、私がお濱さんに濟まないから、まア謔にして、聞くだけは聞いて遣つて下さいな。お濱さんが涙を溢し

て、私に云ひなさるにやア、三吉と鍋が斯々云つたから、私は傍で聞いてゝ、實に口惜かつた、口惜かつたけれども、私が何か云ひ出さうものなら、三吉は彼樣多辯だし、鍋は直きに廻氣を出す女だし、萬一兄さんの耳にでも入らうものなら、淫奔しい事でも爲て居る樣で、さう思はれるだけも、嚴格い兄さんに濟まないから、一處になつて笑つてたけれども、私や口惜くもあるし、お氣の毒でもあるし、如何爲ようかと思つたよッて、可哀想にお濱さんが泣きなさるんです。傳さんが私も三吉や何かと一處になつて、失敬な事を云つてた樣に、思つてらッしやりやしないかと思ふと、私や悲しくなるよッて、お濱さんが可哀想に、傳さん、泣きなさるだらうぢやありませんか。一寸法師だの、縫目……何ぞッて、三吉と鍋が口惜い事を云ふんだよ、人は美目より心ぢやないかね、私や傳さんの實意のおあんなさる處に、何してるのさ、それに失禮ぢやないか、兄さんに云付けて、二人とも追出さないぢや置かないよッて、傳さん、大層怒つてお濱さんが、可哀想に泣きなさるんです。傳さん、些たア本氣で聞いて下さいな。お前さんだッて、女の心持を知らない方ぢやなし、北廓でだッて、好い

とか惡いとか、樓中に評はれて、花里さんを泣かせなさる位だもの、お濱さんの樣子を見なすつたばかりでも、少しや察してお居でなさるでせう、ねえ傳さん、お濱さんが散々泣いたり怒つたりした後で、定どん、後生だから、私の心持を傳さんにお話し申し置いてお呉れッて、傳さん、本氣で聞いて下さいな。傳さん、それぢやア餘り非道いぢやありませんか。お濱さんが可哀想だ、え傳さん。』

定二郎は傳吉が樣子を窺ひながら、さも實事らしく述了り、此方を向かせんとして、尙ほ顏を背向けし傳吉が手を執れば、傳吉はぶる〳〵と打慄ひぬ。定二郎打驚きて、覺えず其手を放せば、傳吉は羞を含みて垂頭きたり。

『傳さん、私もお願ひだ、お濱さんを惡く思はないで下さいよ。え、後生ですから。』

『寫、寫、寫眞挾は。』

傳吉の聲顫へば、定二郎は隙さず、打笑ひつ。

『はゝはゝゝ。大層氣になるんですね。其樣に氣に爲なさらないでも、もう疾くに出來てるんですぜ。』

『え、出來てる。もう疾くに。』

『えゝ、出來てるんですとも。其を家の大將に――さうだ、昨日の朝だ――大將に見付けられて、こりや能く出來てる、乃公に少し貸しといて吳れを食つたもんだから、仕方なしに大將に貸したんです。謊だと思ひなさるなら、明日にも來て御覽なさい。大將が何時も坐つてる處の、傍の柱に掛けてあるから。』

『定さん、困りましたな。』

『困る處ぢやない、お前さんよりかお濱さんの方が、餘程困つて居なさるんですぜ。傳さん、お前さんも隨分罪を作んなさるね。』

『罪作りッ。ひゝひゝゝゝ。何の事だか。』

『何の事だかで、追拂ひは、え、傳さん、些と酷過ぎやすぜ。はゝはゝゝゝ。』

『何れお禮はするけれども、寫眞……。』

『大丈夫です。二三日待つてお遣んなさい。』

『あ、忘れた。定さん、一つお賴みがあるんですが。』

『え、賴みッて。』

お濱の一條を、漸との思にて、どうか斯うか切拔けし處へ、またもや賴みとは何事ならんと、定二郎は氣の無ささうな返事をなし、傳吉が樣子を見れば、以前とは其見幕正反對りたれども、顏に心配の色も見え、云惡げにもぢ付けり。

傳吉は自分が浪費の結果、家屋抵當の一條より其期限の迫りし事、抵當替に金を貸し吳れる人ある事、其保證人に仁壽堂の主人を賴みたき事など物語りて、首尾能く事成就せば、百圓近き豫ての貸金は返濟されずとも能ければ、證人一條を仁壽堂の大將に賴み吳れまじきやと、追引させず賴めば、定二郎は主人仁壽堂、證人に立つべき人ならぬを知れども、浪費は自分が敎へしも同樣、殊に百圓近き借金もあることとて、辭まん樣なく、心安げに受合ひたり。傳吉は甚く打喜び、明日を契りて、其夜は其儘定二郎と手を分ちぬ。

既や四五軒離れし頃、傳吉はちよこ〳〵と定二郎が後を追來りぬ。

『定さん、ぢやア賴みますよ。其から……お濱さんも氣に爲ない樣に、ねえ定さん。』

『畜生ッ。情夫の友達にや、何がなるッ。』

『ひゝひゝゝゝ。賴みますよ。』

（十）

傳吉が母は朝の食事を終り、小僧は店に働き居り、既や九時近き頃、傳吉は漸く床を出來りて、茫然火鉢の傍に座を占めたり。

母は熟々伜の顏を見て、叉手眉を顰めつ。

『お前、如何かありや爲ないかね、顏の色が惡い樣だよ。』

氣遣ふ母の顏を見上げて、まぶしさうに垂頭く傳吉。

『いゝえ、何ともありや爲ないよ。色の惡いのは寢起の所爲かも知れない。』

『それなら能いけれどもね、大層魘されてお居でだつたから、何か夢を御覽かえ。』

『夢を。魘されて居た。なアに、夢も何にも見やア爲ないよ。』

母が夢を見はせずやと問ひし時に、傳吉の面に驚きの色見はれしが、忽ち其色は消

えて、何氣なき體なり。母は伜の樣子に眼を放たず、眉根にいよゝ皺を寄せつ。

『面でもお洗ひだつたら、能いかも知れないよ。お湯を酌つてあげるから、お待ちよ。』

『なに能いよ。水で澤山だ。』

『顏色は惡いし、まアお待ちよ。風でも引いてるんだと不可いから、水はお止し。鐵瓶にも一杯沸いて居るし、銅壺のお湯を足したら、手水を遣ふには澤山だらうよ。』

『あゝ、澤山だとも、濟まないなア。』

『可笑な事お云ひでないよ。』

母が心盡しの湯に、傳吉は顏を洗ひ終り、火鉢の傍に來りしが、母の眼には傳吉が顏色、尙ほいと惡し。何とせしにやあらん、昨日からの樣子、合點の行かざる事多しなど氣遣ふ中、傳吉は時計を仰ぎ見て、甚く打驚き、

『やッ、もう九時だ。こりや大變だ。斯う遣つちや居られない。母親さん、羽織をお呉れ。』

周章せし伜がさまに、母は背後より羽織を着せ遣りなどし、

『お前、直ぐ出掛けるのかい。』

『あゝ、斯うしちや居られないんだから。』

『何がまア其様に多忙しいんだらうねえ。』

『なアに、何でもないんだよ。約束しといた處があるもんだから。』

『店の用でかえ。』

『え、まア其様やうな事で。約束が九時なんだよ。』

『其にしても、まだ朝飯も食べないぢやないかね。』

『朝飯なんざア。些とも飢きや爲ない、胸が一杯の様で。』

『何だねえ、朝飯なんざアだッて、勿體ないよ。まア鳥渡お坐りよ。何だらうねえ、此子は。お坐りと云つたら、まアお坐りよ。一碗だッて能いから、朝飯は食べてお出でよ。それに、お前に聞きたい事もあるから。』

豫て膳立なし置きし膳を、母は伜の前へ無理押しに押付けたり、傳吉も心は急きな

がら、詮方なさに膳に向ひぬ。

『如何したんだよ、昨日の朝から出たり入つたり、些とも落付かないで、そは〳〵してお居での様に、私には見えるよ。昨夜も遲く歸つてお出でだし、何か心配な事ぢやないかい。』

『母親さんは困るよ、直き心配するから。なアに少し引取物があるので。人と組合で爲たもんだから、今日受渡しをするんだし、其で昨日から多忙しいんだよ。母親さん、些とも心配する事アないよ。』

『其なら能いけれどもね、知らないから矢張心配するのさ。其からね、先刻竹村とか云ふ人がお出でだッたよ。』

『えッ、竹村が。』

傳吉は色動きて、母の顏を見詰めつ。

『何とか、云つて居たがね。』

『あの、今日ですが、御承知でせうなア、念の爲め、お門を通りますからッて鞄を提

げててね、二重外套なんぞ着て居る、立派な人さ。長太郎、先刻の人は、他に何にも云はなかつたの。』

『へい、今日が期限ですが、御承知でせうな。後刻お待申しました。へい、此だけで御在ます。』

小僧の長太郎が店より怒鳴るが如く叫べば、傳吉は叱と抑へつ。

『もツと小さな聲を爲ないか。其様事を大きな聲して、怒鳴る奴があるか。』

『へいッ。』

『お怒りでないよ。其組合とかの人かね、竹村と云ふ人ほ。』

『えゝ、さうなんで。』

『も一杯お食べよ。一膳飯は縁喜が悪いと云ふよ。お茶につけようかね。其からね、お前に相談があるんだがね、好い嫁の口があるんだよ。話の様子だと、至極好きさうだし、お前に話さうと思つて、昨日から待つてたんだよ。如何だらうねえ。』

母が熟心には引替へ、いと冷淡なる傳吉、箸を進めて知らず顔。

『お前は仁壽堂のお濱さんを望んでお居でだし、私も至極能ささうに思ふし、手を廻して聞合せて見るとね、お濱さんはもう疾うに他に契約つてるさうだから、其方は仕様がないから、其他に……。』

『へ、へ、、、。母親さん、何を云つてるんだよ、お濱さんが他へ極つてるなんて。』

『仁壽堂の親類を知つてる人があるからね、其人に聞合せて貰ふと、其話さ。』

『其様事があるもんかね。』

『だツて、お前親類の人が云ふんだもの、極つてる先方の家まで知つてるんだもの。本町の二丁目か一丁目の藥種屋だツて。』

『本統かい。』

『本統だとも。お前に嘘を吐いて如何するものかね。』

『本統！　親類の藥種屋！』

傳吉は胸迫り氣激し、眼を見張つて母の顏を見詰め居りしが、軈て放心せしが如く、手に持ちし箸と茶碗を取落せば、八木の落花狼藉、母は呆れて伜が顏を見詰めた

り。

（十一）

仁壽室の主勝之助は、煙管を膝に、苦り切つたる顏色、傍には妹お濱涙ぐみたり。

晝の食事を終りて、店へ出でんとする定二郎を見るより、勝之助がかんとたゝく煙管には吐月峰も割れつべし。

『定二郎ッ。』

『へい、何の御用で。』

『ずッと此方へ來るが能い。』

『へい。』

『お前は困つた男だな。』

『へい。』

『お前は淡路町の傳吉に、お濱の事について、何と云つた。其處で云つて見なさい。』

『へい。』

定二郎はお濱が兄に告げしと覺り、下げし頭を斜めにしてお濱を見れば、さし垂頭きつゝ、襦袢の袖に涙を押へ居る。

『お前は實に怪からん男だ。』

『へい。』

『へいとさへ云つてりや、濟むと思つて居なさるのか。如何に若年と云つたッて、餘り辨が無さ過ぎるぢやないか。串戲だと云つて濟むことだと思つて居なさるのか。傳吉だッて、お前一軒の主だ。立派な店を持つてる一軒の主だ。體格が小さからうが、眼の傍に疵があらうが、お前から見りや、尊まなけりやならない人ぢやないか。其人を欺したばかりぢやアない、若し間違や、お濱を疵物にするのだ。能く考へて見るが能い。お前はお濱と從弟ぢやないか。自分の從弟が迷惑して、嫁入前に惡い評判を立てられるのを、お前は好みなさるのか。串戲にも程があつたもんだ。面白半分

に云つたんだとか、お前は云つてるさうだが、お前それで濟むと思つて居なさるのか。定二郎、默つて居ちやア分明らんよ。お前は情合と云ふ事を知らないのだ。私もお前とは從兄弟だ。從弟のお前が能くなれとこそ思へ、惡くなれとは夢にも思はない。其にお前は、串戲や面白半分に、お濱を種に使つて、從正直な人を欺すと云ふことがあるかい。若しも彼人が、仁壽堂のお濱と私とは、斯う云ふ約束があるんだと、世間へ吹聽したら、お前は如何ならうと思ひなさるのだ。其でなくッても、人の口は兎角腕膳い。一寸法師だとか、變目傳だとか綽號をつけられて居る人と、馬鹿な評判でも立つたら、それこそお濱は一生廢人同樣になるのだ。實に何とも角とも云ひ樣のない人だ。實に怪からん。』

勝之助は妹お濱が嫁入前の惡名を得んことを氣遣へると、定二郎が不心得を怒れるとに、額に筋見ゆる迄憤りつゝ言懲す。定二郎は頭も得あげで、句頭々々に首肯くが如く恐入り、折々お濱が方を斜めに仰ぎて、執成を望むの意を見はすのみ。

『實に如何も驚いた男だ。横濱へ出狀つて、斷るより仕方がない。』

『兄さん、其も餘りですから……。』

お濱は此處に言葉を挾みつ。

『定さんだッて、串戲半分に云つたんだと云つてお居でだし、もう勘忍してあげて下さいまし。私の事から起つたんですから、定さんが横濱へお歸りだと、叔父さんや叔母さんにもお氣の毒ですし、兄さん、今日の處は勘忍してあげて下さいましな。』

少しく茜させし眼もて、兄を仰ぎつゝ詫言すれば、定二郎も漸く取付端を得て、

『どうも、實に其樣譯では。此樣事にならうとは。何とも申譯も御在ません。どうか。惡う御在ました。どうか御勘辨なすつて……。』

『兄さん、定さんも彼樣に謝罪つてお居でだから、勘忍して上げて下さいな。』

『どうも、實に怪からん事だよ。氣を付けなさい。お濱、三吉を呼んで來な。彼奴も多辯でいかんよ。小僧の癖に爲やがつて。』

勝之助の色稍和らぎし樣子に、お濱は三吉を呼びにとて店に行きしに、何時の間にか傳吉來居たり。此方を見つゝにやゝと笑みたるに、お濱の昨夜の事の思ひ合さ

れ、氣味惡さに會釋も得せず、三吉を呼ぶさへ忘れて奥へ逃歸れば、下女のお鍋も遙かに傳吉を認め、お濱に顔を見合せしが、愼みなき心に臺所へ隱れさま、忍び音に笑はんとして、覺えず聲高く笑ひ出せば、お濱も此に催され、聲こそ出さね笑ひ掛けし顔を、早くも兄に見られたり。

『なにを笑ふのだ。』

『あのう、傳さんが店にお出でのを、鍋が見て……。』

『えッ、傳さんが來て居なさるのか。定二郎、機を見て、傳さんに詫びるが能いぞ。鍋、何を笑ふのだ。お濱、お前迄が云ふ口の下から、笑ふと云ふ事があるかい。一同不可よ、些と氣を付けるが能いぞ。定二郎、早く店へ行つて見るが能い、何の用で來なさつたか。』

（十二）

定二郎は漸と虎口を脫れたる心地、ほッと息をついて店へ出づれば、傳吉見るより、

『定さん今日は。』

にや〳〵と笑ふさまの、今日は定二郎にも何とやらん不氣味なり。

定二郎は今しも傳吉が事より、主人の小言は聞きたり、傳吉へ對し何やらん落付かざる心地もすれど、豫てより彼を呑み居ることとて、傍に寄りて平生に變らず物すれば、忍び音になりたる傳吉。

『如何でせう、三どんを横町の伊勢屋さん迄、鳥渡貸しては貰へまいか。』

定二郎は心得、三吉に命じ、傳吉が使にとて出し遣りしが、心に疚しき處あるより、何がな話の種あれかしと、意味もなく傳吉に笑ひ掛けしが、傳吉が三吉へ託せし手紙より思ひつきて、別けて意味ありげに打笑み、

『傳さん、私を拔きなんざア酷いよ。此頃ぢやア伊勢屋の常さんと、旨く遣つてお居でなさるね。今の手紙も何でせう、女の子の處から、へゝへゝ。私を拔きの內證內證で、餘り浮氣を爲なさりやア、お濱さんに云付けますぜ、お濱さんに。』

斯く云掛けて、定二郎は今の小言を思ひ出し、人や聞くと奥を見返れば、傳吉は其

をお濱へ告げんが爲めの所作なりと心得、同じく奥を見返りつ。

『しいッ、何を云ふんだ。其樣事ぢやないんだから……。』

『はゝはゝゝゝ。』

定二郎は覺えず聲高に笑ひしが、主人へ聞えやせしと、またもや奥を見返りぬ。

傳吉は今朝我家を出掛けに、母より聞きたりしお濱が緣談の一條、先づ第一に氣に掛りて、其虚實を定二郎に問はまほしけれども、其にも勝して當座の要事は、仁壽堂が證人一條なり。承諾せしか、せざりしか、一期の浮沈にも關はる事と、定二郎が傍へ居寄りて、尙も忍び音の耳に口。

『定さん、昨夜の一條ね。』

『へい、お濱さんの。』

『其ぢやアないよ。旦那が承知して下すつたらうか。』

『あッ、さうだつた。すッかり忘れてしまつた。』

『えッ、忘れたッ。』

傳吉の顏は見る〳〵中に蒼くなりぬ。定二郎も流石氣の毒顏。

『實に濟まない。忘れたと云つちやア實に濟みやせん。が、實はね、大將の歸宅が、昨夜大層遲くなつて、話す間がなかつたのに、今朝から癇癪筋でまるで寄付けない始末なんで。私も今劍鑿を食つた所さ。だもんだから、云はう云はうと思つて居て、忘れるともなしに、つい忘れたもんだから、傳さん、勘忍して下さい。實に濟みません。』

傳吉は腕組して身動きだにせず、さし垂頭いて言葉なし。定二郎にかにかくと言葉に花を持つて、傳吉を慰めんとすれども、傳吉は溜息つけるのみなり。稍ありて傳吉は腕をほどき、定二郎の顏をぢッと見詰めたり。

『實に困つた。併し、仕方がないです。だがね、定さん、私やお前さんに……』

『へえ。』

『まア其も能いさ。其も能いさ、お濱さんは本町に約束が……。』

傳吉の聲は顫へて、眼は輝けり。定二郎はぎよッとせり。

『お濱さんの緣談は定つてるんだね。』

『えッ、なんですッて。』

『定さん、とぼけちや不可いよ。』

『とぼけるッて。』

『ふん、お濱さんは本町の親類へ歸嫁く事に極つて居て、今年の暮には、婚禮がある んぢやアないかね。』

傳吉冷笑しつゝ云へば、定二郎は心中甚く打驚き、如何にして其を知りたるにや と、當惑限りなけれど、例の調子にて誤魔化さうと、眞顏になりて吃と傳吉が顏を見る。

『困るなア、直にしやくりに乘んなさるんだから、誰かに又何か云はれたんでせう。本統に困ッちまふなア。其樣事を云つちやア、傳さん困るぢやありませんか。』

『困ろッて、お前さんがかえ。』

『私も困れば、お濱さんも困りまさア。』

『お濱さんも。へゝん。』

背後に足音あり。傳吉振返れば、主人勝之助出來りしにて、傳吉を見るより、莞爾打笑みつ坐りたり。

『やア傳さん、昨日は失禮しました。』

『いえ、如何致しまして。またお邪魔を致して居ります。』

傳吉、勝之助と話し始めしに、定二郎は圖らずも脫し得て、ほッと息をつきたり。

『直きに參りますッて、常さんがさう云ひました。』

往來より高聲に呼びながら、歸り來りし小僧の三吉、主人勝之助が店に在りしを見るより、急に悄然て片隅に蹲跪ろ折しも、奥より出來りし下女のお鍋。

『三どん、早く食べて仕舞つて下さい。』

『へーい。』

走入りさまに傳吉を見返り、其眼をお鍋に見合せ、例の如く笑ほんとすれば、お鍋は叱と、拇指を出して眼を丸くす。三吉は首を縮めて、口の中にて、『へ、へ、、、、

ゝ。』

（十三）

昨日伊勢屋の番頭常藏との約束は、仁壽堂を證人に頼み、仁壽堂にて受渡をなす事としたりしに、仁壽堂證人の一條、未だ其運びに到らざるに、常藏は早くも此家に來らんとす、今頼みて今承諾なし果れべきか、其は豫め何れとも測り難し、されど、定二郎が云ふ所に依れば、今朝より極めて機嫌悪しと云ふ、笑顔はなし居れども、何とやらん濟まぬ色も見えて、平生我に對する如くならざる所もあり、如何せば可ならんか、と傳吉が思案に迷へりとは、知らう樣なき勝之助、傳吉が顏をじろりと見て、

『傳さん、何か儲口ですかね。』

『えゝ、なに、儲口と云ふ譯ではないんですが、實はその……。』

傳吉は云はんとして云損じ、ふいと往來を見れば、我家を抵當と爲し居る高利貸の竹村、何時か仁壽堂の前に立居たり。はッと思ひ、悪い所で、と顏を避さんとすれど

も、見合せし眼を何方へか轉らるべき、詮方なさに會釋をなせば、彼は笑を含みて、仁壽堂へ入來らんとす。此店にて催促せられもせば、仁壽堂が手前面目なしと、急ぎ駒下駄を穿きて往來へ出でたり。

『傳吉さん、今朝からお前さんにあひたいと思つて、お前さんの宅へばかしも二度行つたよ。』

『いや、どうも恐入ります。私の方から鳥渡伺はなければならないんですけども、昨日から其、何で。……誠に失敬ですが、鳥渡其處まで來て戴きたいもんで。』

『其處まで。何處へだね。鳥渡此處の店を拜借して、其で事が分るぢやないかね。』

『えゝ、其はさうです。さうですけれども、其鳥渡、鳥渡其處の角までも能いんですから、誠に失敬ですが。』

竹村は厭からせ顏に、此にて用談を爲さんと云ふを、傳吉は兎角して誘ひ行きぬ。

『傳吉さん、能いのかい。今日が期限ですぜ。明日の朝になりや、爲方がないから、

持出す事にして居るんだ、印紙を張るばかりにしてあるんだ、御覽なせえ。』

竹村は鞄の口に手を懸けんとして、傳吉が樣子を見る。傳吉は唇頭を打顫はる。

『能うがす。能うがす。今晩までには、何樣に遲くなつても、屹度、屹度持つて行きますから。ね、ね、大丈夫なんで。夜が明けたッて、夜が明けたッて……。』

『串戲云つちゃ不可いよ。夜が明けりゃ、もう明日ぢやないかね。』

『え、明日、明日……。』

『明日ぢやア仕方がないぢやないかね。今夜の十二時迄が今日さ。』

『さうです。知つてます。今晩の十二時……。遲くなつても、夜が明けても……。』

『はゝはゝ。傳さん。同じ事ばかり云つたッて仕樣がないよ。能いんですな、今晩の十二時。』

『えッ、えッ、能うがす、う能がす。竹村さん、屹度御迷惑は掛けませんから、私のお袋に聞かせないで、賴みますよ。』

『それは承知だ。だから、お前さんの店に二度も行つたけれと、何も云はなかつたのさ。』

『何も云はないで、難有うがす。』

『ちゃア、能いんだね。間違へば母親さんの耳にも入る譯だし。能いんだね。』

『えッ、能うがす。』

『今夜の十二時まで。』

『えゝ。』

竹村は追引させず言葉を番ひ、我さす方へ急ぎ行く。

傳吉は竹村が後影を見送るとなく、立ちたる儘動かす、其眼には涙が溢れんばかりなり。

『やア、傳さん。』

『アッ、おッ、常さんですか。』

『先刻は態々お使で、恐入りました。もッと早く參りたいと思つたんですけれども、主人の用がつい濟みかねたものですから、誠にお待たせ申しました。』

『いえ、なアに、お多忙しい所を。』

『多忙しくもないんですけれども、主人の用だもんですから。ぢやァ、仁壽堂さんへ。』

『え、鳥渡、あの、何で。』

傳吉は此に到りて進退谷りぬ。的もなき金を、漸く常藏より借得る事になりて、稍心の落付きしも束の間、期限は今夜の十二時、其金は我前なる人の懷中に、手を出せば攫める樣なれども、證人なきばかりに、如何にとも詮方、ないたりとて追付かず。あゝ、證人になつて呉れる人が、と胸は拐らるゝより尙ほ苦し。

（十四）

安會席の奥まりたる一室、客は傳吉と常藏、下物は甚く荒れて、酒は既に亂に入りたり。

乞食伊勢屋の名を取りたる家の番頭、久しぶりに身になる下物の、喉から引込まるるばかりに覺えて、平生嗜まぬだけ酔も早く、既や、舌も廻らぬ迄になりたり。

『傳さん、も、も、も、一杯。げえい。』

傳吉は下物も味ひなく、酒も咽を下らず、飲めども食へども、酔ひもせねば腹も膨れず、胸は拐らるゝが如く、何ともかとも云はん方なし。今しも常藏が射したる猪口を、受けることは受けながら、口をつける程の氣力もなく、茫然と常藏が顏を見て居れば、常藏は一人機嫌し

『傳さん、傳さん、す、す、すぐに御返、御返杯と願ひたいね。仁、仁、仁壽堂の、た、た、大將遲え、遲え〳〵。』

『今、其、使を遣つたんですがね、今、客、客來があつて、鳥渡手が脫されないから、少時待つて〻戴きたいと云つて來たんです。常さん、御迷惑でせうが、どうか、も少し待つて戴きたいもので。』

『も、も、も少時。よ、よ、よがす。こ、こ、斯うなりや、ど、どうせ、め、迷惑序だ。ね、ね、傳さん、はゝ、はゝゝ。お、お、おほ、仁、仁壽堂の、お、お濱さ

ん、お濱さんだ。ち、ち、畜生ッ、僕、僕なんざア、い、いの、命も入んねえ、入んねえ。ち、ち、畜生ッ。でッ。でッ、傳さん、お、お、お前さん、い、い、美女だ。ち、畜生、た、堪んねえなア。』

『はゝはゝゝ。大分御執心ですな。お前さんも美女だと思ひなさるかね。』

『な、な、何だッて。お、お、思ひなるかッて。えへ、えへ、えへ。お、お、お濱さんの爲めなら、でッ、傳さん、ぼ、僕ア何だッて、ほ、欲しかアない。こ、こ、此だつて……。』

常藏は懷中に手を差入れ、胴卷を引出し、傳吉が前へぽいと投出す。

『こ、こ、此金だッて、す、すぐ、直ぐに奉るねえ。はゝ、はゝ、あは、はゝゝ。』

『お濱さんの爲めなら、此をッ。』

傳吉は卷を取上げしが、二百圓近き手當り、此故に此苦勞をする事ぞ、と覺えず手に力の加り、夢心地になりて、常藏が顏を見詰めつゝ戰慄ふ。

常藏は晴行寄りて、傳吉が手にせし胴卷を取らんとせしに、傳吉が手には力入りたれば、生醉本性違はずして、俄かに心付きしか、傳吉が手より奪ふが如く、我懷中へ押入れたり。

『はゝゝゝゝ。』

『はゝゝゝゝ。』

『傳さん、お前さんに上げるなア、ま、ま、未だ早えんだ。えーい。仁、仁壽堂の大將、あ、あ、餘り……。』

『鳥渡待つて下さい。もう一遍使を遣るから。なに、直きです。人車を持たせて遣るから、もう長くは待たせやせん。鳥渡、鳥渡、も少し。』

傳吉は常藏が樣の一變せしに、我も氣付きて心に驚き、常藏を待たせ置きて、座を立ちたり。

仁壽堂の來ると云ひしは素より僞言、常藏を此へ引出せしも、一時を欺きしにて、常藏が樣子を窺ひ、切羽詰りし難儀を打明け、一判にて金を借らんが爲めなりしに、常藏が今の樣子、倒低も承知せん望なし。何とせばやと、奥より表へ出來りたれど

も、迎を出す用あるにもあらねば、また私に立戻りて、便所へ入りたり、便所を出で、手を洗ひつゝ空を仰げば、庭もせに櫻花の咲き亂れて、雪洞の火影にちらりちり、花瓣の梢頭はなるゝ風情、得も云はれざるに、覺えず見惚れたりしが、我に還り し時、全身ぶる〳〵と戰慄ひぬ。われ知らず前後を見返りし眼光いと鋭く、首肯くが如くいと深く呼吸をつく。

『お、おーい。おーい。でッ、傳さん。』

常藏が我を呼びつゝ手を禁けるに、傳吉は我にもあらず走り戻りつ。

『常さん、今ッ、今直きに。ぢやア熱燗のを、もう二三杯。え、さうして常さん、常さん、此ッ限ぢや、餘り濟まないから。』

折能く來合せし女中の、銚子を手にしたるを見て、傳吉熱燗かと問へば、熱燗と答ふ。それ幸ひと無理强に立續けて四五杯、自分常藏に酌する傍ら、手早く勘定を濟まして、足元覺束なきを介抱しつゝ、家外へ出でたり。常藏が無用と辭する人車に、相乘しつゝ其と指圖すれば、人車は猿樂町へは行かずして、萬世橋を北へ、常藏は其と

も知らず、醉に夢地を辿るなるべし。

（十五）

次の朝仁壽堂の勝之助は、平生よりは早く店へ立出で、彼方此方藥瓶など調べ居り、葡萄酒の壜を取上げ、透し見て小首傾け、

『定二郎、此は如何したんだ。些ともないぢやないか。此樣事を爲て置いちやア困るよ。早く取替へて置くが能いよ。』

『へい。もう、其ッ限で外にもありませんから、其でつい、不注意せんでしたけれども。』

『もう、皆無。其樣筈はないぢやないか。』

『へい、もう一壜あつたと思つたんですけれども、昨日調べて見ましたら御在ません。』

『なけりや、無いで爲方がない。直きに取寄せないぢや困るよ。埼玉屋へ鳥渡三吉を

走らせて、半ダースばかり取寄せなさい。』

『へい、三吉、傳さんの所へ行つて、葡萄酒を半ダース。大急ぎだよ。』

『へーい。』

三吉は命を受けて、履物穿くや否や走り行く。

勝之助は尙ほ其他をも調べ終り、火鉢の傍にむづと坐り、定二郎が顏をじろりじろり。

『定二郎、お前尙些と氣を付けなければ不可ぢやアないか。今調べて見ると、毒藥の棚に錠が卸してないぢやないか。どうも困るよ。其と云ふのも、店を疎かに思ふからだ。昨夜は何處へ行きなすつた。』

『へい、鳥渡。』

『鳥渡だ。渡鳥行つて、今朝歸つて來る奴がありますか。何を馬鹿を云つてるんだ。此迄もさうだ。私が知らん顏をして居れば、能い氣になつて、氣を付けないぢや不可いよ。』

『へい、どうも恐入りました。』

『若い者だからと云つて、今から其樣事では、迚も見込がない。私なんぞも……。』

昨夜定二郎が他に泊りたるを、勝之助は云懲さんと、益す說き進まんとせる時、醫師の處方書を持參し、調藥を請へる客あり。定二郎は此に便を得て、勝之助が前を脫れ、調藥に掛らんとせる折しも、ちよこ〳〵と小走りに店先へ來りしは傳吉なり。

傳吉は平生襟にしたるお納戶縮緬の領卷に、顏の半分を掩ひ、何やらんそはつきたる樣子。

勝之助は早くも聲を掛けたり。

『傳さん、今宅から來なすつたかね。』

『え。えい、今朝早く出掛けたもんですから。』

『今實は葡萄酒をお貰ひに上げたんだが、お留守では分るまいね。』

『なに、分らない事もありますまい。が、澤山ですか。』

『なアに、半ダースばかり。まアお掛けなさいな。』

『へい。其位なら無い事もありますまい。』

傳吉は店頭に腰を掛けて、領卷の半を除りしに、顏色は灰よりも尙ほ靑し。

『傳さん、如何か爲すつたかな、大變顏色が惡い樣だが。』

勝之助が驚き問へば、傳吉は勝之助の顏を屹と見返し、其眼を定二郎が方トりぐるりと往來へ轉し、再び勝之助が顏を見る。

『どうも心配な事が起つたんです。橫町の伊勢屋の番頭さんが、昨夜出たッきり歸宅らないんですから、其で私はひどく心配して、今朝も朝から、まだ食事も食べないで……。如何も困ッちまつたんで。』

『へえ、さうかね。それは伊勢屋さんでは心配だらう。彼常さんとか云ふ。』

『えゝ、其常さんがなんで。』

『定二郎、お前聞いたか、其樣噂を。』

『いゝえ、其樣噂は些しもない樣です。』

『さうですかえ。それでは先ア……。實に心配爲ッちやつたんです。』

『お前さん、彼番頭さんと、其樣に懇意に爲なさるのかね。』

『えッ。えゝ。實は昨日、鳥渡話す事があつたもんですから、鳥渡その……。』

定二郎調藥を終りて客に渡せば、客は歸り去りぬ。定二郎も火鉢の傍近く坐りて、傳吉に問掛けたき樣子なれども、主人の前なるに口を出しかね、もぢ〳〵せる處へ、小僧の三吉走り歸りぬ。

『埼玉屋さんでは、傳さんが留守だから分りませんで申しました。やア、傳さん、此處に居なさるんですね。お前さんの家では大變。』

『えッ、大變。』

傳吉は愕然として立上りぬ。

（十六）

傳吉は我家に變事ありとの三吉が言葉に、愕然として立上りしが、眼光鋭く四邊に

働き、又もや領巻をもて顔を包みぬ。

勝之助は定二郎に顔見合せ、三吉に對ひて、

『大變て、何だ。』

『なアに、傳さんの母親さんが、傳さんが昨日から歸んなさらないと云つて、大變に心配して、泣きさうな顔をして居なさつたんです。』

『何だ。大變だなんて、傳さん、母親さんが心配してお居でだと云ふから早く歸つてお上げなさい。』

『へい。なにね、昨夜遲く歸つて、今朝早く出たもんだから、お袋は寢て居て知らなかつたんです。三どん、大變だッて云ふから、私や吃驚した。嚇殺しちやア嫌だぜ。』

『まア何しろ、早く歸つておあげなさい。母親さんに心配させちやア、可哀想だ。』

『えゝ、さう爲ませう。なにも心配しなくッても能いんだけれども……。』

傳吉は溜息つくが如く呼吸を深くつき、立去らんとして去りかね、動もすれば奥を見かての樣子。三吉は俄に思出せしが如く、定二郎に對ひ、

『定さん、大變な事があるよ。』

『大變な事ッて。』

『人殺し。』

『えッ、人殺しッ。』

傳吉は飛上らんばかりに打驚き、覺えず二三歩あゆみ出せしが、俄に氣付きて、いたく落付きて、又もや腰を掛けたり。

『あゝ、吃驚した。三どん、人殺しと云ふなア、何處にあつたんだ。何人が殺されたんだね。』

『吉原田甫。』

『えッ、吉原田甫。』

『吉原田甫のね、直き此方の入谷だとか云ふんです。空屋の中に坊さんが。』

『なに坊さんだッて、うふッ。』

『えゝ、坊さん、お醫者の坊さん。』

定二郎は冷笑しつゝ。

『何だ、お醫者の坊さんだ。今時坊さんのお醫者があるものか。』

『だッて坊さんのお醫者だから仕方がないや。もう一週間も前に殺されたんだらうッて。慘酷ぢやありませんか、素裸にして、細引で頸を縛つて、細引の兩端を斯う云ふ鹽梅式に、兩方の柱に縛つてあつたんですッて。』

尙ほ三吉が語る所に依れば、吉原田甫に枕みし入谷村に新築せし三軒立の長屋あり。四隣遠ければにや、移り住む者もなかりしに、今より一週間ばかり以前、一人の賤しからぬ女、件の長屋の差配人方へ來り、彼の長屋の中央なるを借受けたしと申込みたり。兎角緣遠かりし家の、借人つきし事とて、差配人は喜び承諾きたれば、何れ一兩日中に轉住し來るべしと約し置き、女は歸り去りたり。其後一週間ばかり過ぎたれども、何の音沙汰もなかりしかば、差配人は待草臥れて、樣子見かたゞ〳〵、三丁ばかり離れし件の長屋へ到り見しに、未だ移り來らずにや、三軒ながら以前の儘の明屋なり、差配人は舌打しつゝ家内を改め置かんと、先づ中央なる長屋の戸を開きしに、

一種異樣の惡臭鼻を衝いて起りたれば、ぎよつとしながら家内を覗けば、人の立てるが如きを見たり、吃驚しながら、瞳子を定めて態々透し見しに、又手も無慘なり、素裸ににせし坊主を細引もて絞殺し、其兩端を左右の柱に繫ぎたれば、死骸は宙に釣されれ、一寸見には、立ち居るが如く見えしなりき。竹の皮と空樽、箸茶碗などの、四邊に捨てられたる外には、一物だもあることなし。差配人は膽を消して直ちに巡査派出所へ注進せしに、本署より警部を始め刑事巡査醫師など馳付けて檢視し、其々調査を遂げたりしに、此に思合する訴あり。其も亦一週間程以前の事なりき。淺草小島町に山村と呼ぶ、今年六十七歲になれる漢家の老醫ありき。或夜の一時近き頃、山村が門を叩き、急病人あればとて、來診を請ふものあり。深夜なれば老人の大儀がりて、謝絕したりしに、是非に先生の御來診を願ひたし、病人も其を生前の賴みなりと申せばとて、泣かぬばかりの賴みに、山村老醫も憐れを催し、直ぐ後より往診すべしと答へしを押返して、お迎の人車を引かせたれば、此にて直樣お出でを願ひたしと云ふ。老醫は其意に任せて迎の人車に載せられて出行きしまゝ、翌朝に到るも歸宅せず、次

の日も音信なければ、家内一同周章狼狽し、處々を尋ねけれども、病家の町名番地を聞置かざりしかば、たえて手掛りあることなし、詮方なきまゝ訴へ出でしなりと云ふ。

老醫が家よりの訴と、入谷村の差配人の訴と、頭の丸きよりして符合せるにぞ、直ちに老醫が家人を呼寄せ、長屋の中なる死骸を示せしに、老醫が家人は見るより驚き悲み、此に相違あらじと云ふ。死骸は其儘家人に引渡せしが、其筋の人々の鑑定によれば、犯人等は前より深く計りて、先づ差配人を欺きて長屋を借受くる事になし置き、其夜山村老醫を欺きて此へ連れ込み、斯く慘酷なる罪を犯せしに相違なし。其目的は老醫が所持の金時計を奪はんが爲めにして、迎の爲めにとて人車を持行きしは、如何にも其計謀巧妙なり、且つ其犯人の中には、女も加はり居るとの事迄は想察らるれども、手掛りとなるべき一物も殘り居らざれば、警官等も流石に手を付けん樣なく、今に其手掛りだになしと云ふ。

三吉が人殺しの一條を語れる中、傳吉は俄に思出せし事ある樣子にて、急ぎ仁壽堂を辭し去りしが、我家の方角へは行かで、水道橋の方へ、例の如くちよく〳〵と走り去りぬ。

（十七）

傳吉が母は、一夜たりとも家を明けし事なき伴が、昨夜は終に歸り來らざりしかば、何とせし事やらんと待明せし疲勞をも忘れて、今か〳〵と門に立ち内に入り、心も落付かざる所へ、仁壽堂より小僧の三吉、葡萄酒を半ダースとて來りたれば、長太郎に命じて出させんとするに、なしと云ふ。棚に在る其壜はと問へば、長太郎もぢつきて急には答へず。尙ほ迫り問へば、空壜なりと答へぬ。傳吉が母は三吉が手前も氣の毒さに、傳吉留守にて分り難ければ、歸宅次第調べさせ、此方より持參致さすべし。旦那の前惡からず申してと云へば、三吉は心得走り去らんとす。

『もし、もし、一寸。』

傳吉は三吉を呼び止めつ。

『もし、仁壽堂さんへ、傳吉が參りはしませんでしたかね。』

『何時です。』

『あの昨晩か、今朝ほど。』

『いえ、今朝は未だお見えなさいません。昨日は晝間お出でなさいました。』

三吉は昨日晝頃、傳吉が仁壽堂へ來りし事より、自分が伊勢屋の番頭へ使せし事、豫て其名を知り其顏を見知れる竹村と云ふ高利貸と、傳吉が仁壽堂の店前にて出會ひ、共に立去りしが、其より後今朝に至るも來らざる由を物語りぬ。

『高利貸の竹村。』

傳吉が母は斯く呟きて後、

『どうも難有う御在ました。實はね、昨日から未だ歸宅らないもんですから、如何したかと思つて、心配してるのですよ。萬一、お前さんへ傳吉が來ましたらね、私が心配してるから、早く歸る樣にと、お前さん能ぐくさう云つて下さいよ。』

『えゝ、お出でなさつたら、屹度能くさう云ひますよ。』

『何卒ねえ。一寸。』

二錢銅貨一枚、三吉が手へ握らせ、

『本統にお賴み申しますよ。』

『どうも濟みません。難有う。』

羨ましげなる長太郎を見返りたる三吉。

『長さん、あばよ。』

勇みに勇んで走り去りぬ。

傳吉が母は、今の三吉が言葉を思ふに、高利貸の竹村、昨日二度まで傳吉を訪ね來りし其人の名も竹村、傳吉が何の爲めに高利貸を知つて居るのか、昨日の朝の話には、何か組合の引取物がある、其仲間を竹村と云つた樣であつた、多分組合仲間の人だらう、其でなければ、高利貸なんぞを知つてる筈がない、其に違ひない、其は其として、如何してまア歸宅らないんだらう、遊びをする樣子ではあるけれども、一夜でも泊つた事はないのに、據ない交際でもあつて、其で歸られないのかも、知れない、其なれば其の樣に、端書でも出して呉れゝば、此樣に心配は爲ないのに、何にしても

早く歸宅つて呉れなければ、仁壽堂さんの註文もあるのに、まア何を爲てるんだらうねえ。

『御免下さい。』

『へい。』

見れば、昨日も二度まで來りし竹村、今も今とて心に掛れる竹村、遠慮もなげにずッと入來りぬ。

『傳吉さんは御在宅でせうか。鳥渡お目に掛りたいのですが。』

『傳吉で御在ますか。唯今出まして留守で御在ますが。』

『留守ですッて。』

『へい。まだ歸宅りませんので。』

竹村は奥の方を差覗きつ。

『留守ぢや仕方がないです。お歸んなさつたら、さう、云つて下さい。昨夜が期限の事を承知して居なすつて、今朝になつても挨拶を爲なさらないから、仕方なしに訴へます。今日此から裁判所へ出ますから、其積りで居なさる樣にと、能うくさう云つて下さい。左樣なら宜しく。』

云捨てゝ歸らんとする竹村、傳吉が母は周章狼狽して、

『貴所、もし、鳥渡お待ちなすつて下さいまし。裁判所へお願ひなさるッて、そりや何をで御在ます。』

『成程、お前さんの知んなさらないのは、尤もです。』

竹村は此家を抵當に傳吉へ貸金ある事、昨夜の十二時が其期限なる事、昨日傳吉と堅く約束せし事など云聞かすれば、傳吉が母は呆れ果てて、少時は言葉もなかりけり。

『まア實に驚いて仕舞ひますねえ。まア如何したら能う御在ませう。お腹もお立ちなさいませうが、傳吉が歸宅次第、何とか相談を致しまして、決して御迷惑は掛けませんから、せめて傳吉が歸宅ります迄、御猶豫を御願ひ申します。決して御迷惑は掛けませんですから。』

『なアに、其樣に心配を爲なさらないでも能いんです。今日願つて今日立退いて貰ふ

譯でもないんですから。傳さんもお若いから、つい此樣事になつたのでせう。お前さんには、お氣の毒な譯だが、はゝはゝゝ。傳吉さんがお歸んなさつたら、話して置いて下さい、何れ又來ますから。』

竹村は云ひ捨てゝ歸り去りぬ。

如何も金を借りる譯はないのだが、貯金もある事だしと、傳吉が母は先づ箪笥の奥の小抽匣から、金包を出して封押切り、見れば洋紙の紙幣の形したるが入りたるに、吃驚して顏色變りぬ。此にて家を抵當の借金の譯も分りたれど、彼傳吉が、如何して斯樣事を。昨日の朝の顏色惡かりしも道理、昨日より今日歸宅せざるも道理、其に付きても氣の小さい伴、もし無分別にてもと思ひ付きては、心配で〳〵堪らず、あー、氣に掛る、家どころではない、傳吉が無事で居て呉れます樣にと、俄かに神棚に燈明をあげなどし、半狂亂になりて立ちつ居つ。

（十八）

傳吉が仁壽堂に立寄りしは、一にはお濱に見え、一には伊勢屋の樣子を聞かん爲めなりしなり。伊勢屋には變りたる樣子もなく、近處に何の噂もなしと聞くに、先づ心を安んじたれども、お濱は姿も見えねば、聲さへも聞く事なし。定二郎に尋ね見ばやと思へど勝之助傍に在れば、其便を得ざりし中、小僧の三吉外より歸り來り、淡路町の我家に變事ありと云ふに、心愈よ驚き、殺人談の一條に到りて、終末まで得聞かず、そこ〳〵に仁壽堂を辭し去りしなりき。

何とか思ひけん、我家の方角へは足を向けず、水道橋より人車に乘り、車代を取極めずして、ひた急ぎに急げと命じぬ。車夫が其向ふ所を問ふに氣付き、上野へと命じたりしが、壹岐坂下に到りし時、王子へ急馳げよと云ふ。車夫心得白山を上り路を右へ轉ぜんとするを、唯眞直に板橋へ到れと命ず。車夫は傳吉を仰ぎて呆れ果てしが、車代に厭ひなしと云ふに勇みて、巢鴨病院の此方迄到りし折、拔道あらば其を通りて、又もや王子へ行くべしと云ふ。車夫は此に到り、人車を止めて傳吉が顏を打眺め、商賣なれば車賃次第、何れへ行くも仰の儘なれども、王子ならば王子、板橋ならば板橋、

到達くべき場所を確と定め玉へと云へば、傳吉は楫棒を卸させて飛下り、一圓札一枚、御苦勞と云ふまゝ車夫に摑ませ、とある小徑へ走り入りたり。

傳吉は小徑に走り入り、角一つ曲るより、ひた走りに一町ばかり走りぬ。軈て足を止めて躊躇ふ體なりしが、またもや小走りに急ぎ初めぬ。或時は畑を横ぎり、或時は人家の垣を潜り、兎角して染井の共同墓地へ來りぬ。墓地より王子道へ出で、折しも來合せし人車に飛乘りしが、花見客のいと多きに氣付きて、飛鳥山の此方にて人車を捨て、山下の駄菓子屋の裏口より湯を請ひ、銀貨一枚投出して、裏道傳ひに瀧の川に到りしが、此にも足を止めて、彼方此方を彷徨ひ、稻荷の社より鐵道線路を望むと其儘、停車場へ駈付けたり。折しも切符を賣初めたれば、傳吉は能谷までの乘車券を買求め、場の一隅に小さくなりて列車の來るを待居たりしに、乘車切符を改めんとするに到りて、何とか思ひけん、場を外に走り出で、又もや人車を雇ひて、根岸まで急げと命じぬ。道灌山下に到りし時、又もや惜氣もなく一圓紙幣を與へて、人車を下りて小徑を山下に走り入りぬ。日暮里より谷中の墓地へ紛れ入り、芋坂を根岸へ下りんと

として又踵を返し、墓地の間を彼方此方へ縫ひて、上野の山中へ入りしは午後五時を過ぎたりき。

* * * *

櫻花は忍が岡に散りて、隅田堤にも今は稍盛りを過ぎたれど、去年よりの約束なりと、お濱にせがまるゝまゝ、勝之助はお鍋を伴に、三人、向島の歸途、上野も捨て難しとて、屏風坂より歩を入れしに、榮枯は二勝地にも著しく、竹屋の渡の人に人を積みたるには引替へ、櫻が岡には落花の痕をも止めず、晩鴉空しく棲に噪ぐあるのみ。

お鍋は何をか見出しけん、お濱が袖を曳きて、指す方を見るより、お濱の顏色は變りたり。

『おや、傳さんぢやないかえ。』

『なに、傳さんが。』

勝之助も氣付きて彼方を見れば、彼名殘をのみとゞめたる黑門を出來りて、大佛の前をちよこちよこ歩めるは、黃昏の遠見にも傳吉に紛れなし。

『如何して彼様處を歩いてるんだらう。宅へ歸つたのか知らん。』

勝之助斯く云ひける途端に、撞出したる鐘聲の、突如として傳吉が頭上の鐘樓に起れば、傳吉は飛上りて、物に追はるゝが如く一散に走り出しぬ。

『やア駈出した。』

勝之助お濱等顏を見合せし間に、傳吉は何地行きけん、既や其姿見えずなりぬ。

（十九）

勝之助お濱等は傳吉を見失ひ、鐘聲に驚きて走りし彼が様を笑ひ、彼の母が彼昨夜歸らざりしとて心配へること、且つ彼が今朝店に來りし折の擧動の尋常ならざりし事など、語り合つゝ歩む中にも、お濱は何となく氣味惡く、夕嵐の別けて身に染む心地し、淸水堂を後になし、既に石坂に下らんとせる時、人あり、背後に在り。

『お濱さん。』

呼掛けたる聲音は覺えある傳吉。お濱は覺えず叫びて兄が腕へ縋りつく。勝之助は

妹を圍ひつゝ振返れば、傳吉悄然として立居たり。

『へゝゝゝゝゝ。』

『傳さんぢやないかね。如何爲なすつた。』

『えゝ。』

『家へ歸りなすつたかね。』

『えゝ。』

傳吉は勝之助へ答へながら、其眼は兄の背後に齒の根も合はで、戰顫へるお濱へぞ注ぎける。

勝之助はお鍋に眦せし、手もて後ざまにお濱に教へて、先へ行けと命ずれば、お濱はお鍋と手を取り合ひ、石坂の過半は駈下り、三枚橋の此方、往來繁き邊に、兄を待合すなるべし。

傳吉は覺えず二三歩あゆみ出し、石坂を下り行くお濱に目も放たず、恍然として立ちたる顏色、勝之助は身柱寒き心地す。

『傳さん。』

『えゝ。』

振向きたる傳吉が眼には涙見えたり。

『大層顏の色が悪いぢやアないかね。如何爲なすつたんだね。』

『何だかね、心持が悪くッてね、心配事が出來たもんだから。』

『心配事ッて、何樣事なんです。』

『なにね、私が遊蕩をするッて、お袋に、お前さん所の三どんが、種々な事を云つたもんだから、お袋は心配するし、泣いて心配するし、私や居ても立つても居られないんだから……三どんには困ッちやッた。』

『三吉が。それは如何もお氣の毒でしたね。彼奴は多辯で仕樣がないなア。歸宅つたら叱りませうよ。其位の事なら、私が阿母さんに、心配爲なさらない樣に、能く云ひませう。』

『えゝ、さう云つて遣つて下さい、心配爲ない樣に。お袋は可哀想だ。旦那賴みます

よ。』

傳吉は垂頭いて眼を閉せしが、涙は目蓋を漏れて、はら〳〵と落ちたり。

『ぢやア、あれから宅へ歸んなすつたんだね。』

『えッ、鳥渡、鳥渡歸つたんだけれども。』

『そりや能かつた。時に傳さん、お前さんは今頃何處へ行きなすつたんだね。』

『えッ。なアに、鳥渡用があつたもんだから。……旦那、お濱さんは、何時お嫁に行きなさるんです。』

傳吉は輝くが如き眼して、勝之助が顏を屹と見れば、勝之助は愕然とせしが、俄然笑ひ出しぬ。

『はゝはゝゝゝ。お濱がお嫁に。何時の事だか、まだ的もありやア爲ない位さ。』

『まだ、的も、極らないんで。へゝゝゝゝ。』

傳吉は輕く淋しく笑ひ掛けしが、俄然耳をそばだて、其眼は四邊にきよろ付きぬ。

『旦那、御免なさい。』

『傳さん／／。』

勝之助が呼ぶを耳にも入れず、例の如くちよこちよこと小走りに走り出せしが、清水堂の此方の坂に、頭の隱るゝと共に、飛下りるが如く走る足音聞えたり。

勝之助も妹の上氣に掛れば、急ぎて石坂を下り、三橋へ來り見れば、お濱はお鍋と共に心も落付かで待ち居たり。

『兄さん、早く人車で歸宅りませうよ。』

『あゝ、歸らう。だがね、鍋は留守に爲たし、定二郎と三吉が留守居だから、何もお菜がないだらう。何處か、其邊で食事でも食べて行かうよ。』

『私やもう食事なんか如何でも能いの。早く歸宅りませうよ。』

『其樣に心配する事があるものか。乃公に任せて置くが能い。』

兄の言葉にお濱も詮方なく、後見返りつゝ池の端なる、とある鰻店が樓上に上り、小西湖の夕景得も云はれざる眺に、お濱はお鍋と共に欄に倚り、覺えず樓下を瞰れば、傳吉がちよこ〳〵と走りて、寶丹の角の方へ急ぎ行く後姿を見えける。お濱は慄

然として逃入りぬ。

食事漸く終れば、お濱が賴みに勝之助は人車を命じ、鰻店が前より人車に送られて、一同猿樂町へぞ歸りける。定二郎店に見えざるに、勝之助は何れへ行きしぞと三吉に問へば、今し方横濱の親御急病なりとの迎に、御留守なれども餘事ならねば、一晩のお暇を戴きました、宜しく申す樣にと申置いて、取るものと取敢ず新橋へ急ぎ行きたりと云ふ。勝之助は小首を傾けしが、三吉へ小言も云はれず、外に來客は、と問へば、定どん出掛けられし少し前に、あの傳吉さんが、と聞くに、勝之助お濱は顏見合せて打呆れ、少時は言葉もあらざりき。

（二十）

仁壽堂の勝之助は、昨夜より定二郎横濱へ行きたれば早朝より店に坐り、新聞紙を手にして、先づ雜報より讀初めたるに、『入谷村の人殺し』と題する標目あり、此ぞ昨日の三吉が話の一條なるべしと讀行けば、三吉が語りし所と大同小異なり。次に又人

殺しの標目あり、『太郎稻荷の人殺し』と題したり。又かと獨語ちつゝ讀行きけるが、其殺されし男の名、町所番地を讀むに到り、愕然として新聞紙を取落したり。

新聞の記事に寄れば、太郎稻荷と北廓との間、俗に吉原田甫と呼べる田の中の、路より一間ばかりを去れて、何者にか殺されし男の死骸ありしを、昨朝通り掛りし者見出し、巡査派出所へ訴出でしにぞ、其筋の人々出張して、檢視せしに、手拭をもて絞殺せしにて、其傍には淺黄木綿の胴卷捨てあり、外に加害者の手掛りとなるべき一品も殘らねども、被害者の袂に鼻をかみし二番半紙ありしによりて、前夜吉原に遊びし者なるべしと其筋の人は鑑定したり、直ちに其々加害者捕縛の手配に及びしが、未だ少しも手掛りを得ず、被害者は神田猿樂町〇丁目の質商伊勢屋某方の番頭常藏と云ふ者なりとぞ記したり。

勝之助は件の記事を讀終ると共に、傳吉が或は其加害者にはあらずやとの疑念、忽然其胸中に畫かれたり。傳吉が昨朝我店に來りし時の顏色擧動、一昨夜彼が家に在らざりし事、昨夕上野にて逢ひし時の彼が樣子の不思議なりし事等、一々彼が其加害者

なるべしとの推斷の材料となり來り、殊に小僧三吉を賴みて常藏へ手紙を送りし事、常藏が直ぐに來るべしと返事せし事の如きは、動かすべからざる證據なるが如く勝之助は感じたり。斯く推斷し來れば、昨朝來りし時、常藏が昨夜より歸らずと云ひし事、三吉より我家に變事ありと聞きて、愕然として立上りし事、人殺しと聞きて駈出さんとせし事、入谷村の人殺事件を得聞終らざりし事、上野にて晩鐘に驚き逃出せし事、石坂より上り來る人の足音に耳をそばだて、俄に暇を告げて清水堂の傍の坂を駈下りし事、自分との對話の中に、心配な事が出來しと云ひ、居ても立つても居られぬと云ひし事等、彼が加害者たるを確むる證據ならざるはなし。

勝之助は三吉に命じて、横町の伊勢屋の樣子を見來らしめしに、三吉歸り來りて、彼家の小僧の談話なりと云ふを聞くに、常藏一昨日出でし儘歸り來らず、昨日晝頃其の通知に依りて、常藏が吉原田甫にて絞殺されしを知りたり、店の名前にも關ればとて、死骸は常藏が受人に引取らせたり、尤も一昨日家を出る時、蹴て主人に預け置きし金百八十何圓に、主人より借用せし金十五圓を所持し居たり、胴卷は死骸の傍に捨

てありたれども、中なる金は奪はれしと見えてなし、蝦蟆口に兌換券二圓と、銀貨に銅貨取交ぜ四十何錢は、其儘懐中なし居たりしとなり。

常藏が二百圓の金を所持せしは新聞紙に見えざる所なれども、昨日傳吉が仁壽室の前にて、高利貸の竹村に出合ひ、共に立去りしを知りたる勝之助には、傳吉が金を要すべき事情あるも想像され、常藏が金を所持せし事も、亦傳吉が加害者なるべしとの推斷を確むるに似たり。

斯くて勝之助が腦裡に湧き來りし疑問は、傳吉が既に其筋の捕ふる所となりしか、否やなり。未だ捕へられずば、今は何處へか脫れたる、既に捕へられたらば、何處にてか捕へられたる、何れにしても可哀想なるは傳吉がお袋なり、斯くと聞きなば、如何に驚き悲しむやらん、氣の毒な事を見るものかなと、加害者は傳吉に決したるが如き心地し、三吉に命じて淡路町へ走らせ、傳吉が家の樣子を探らせんとせり。

三吉が常藏殺されたりとの告に、お濱も店へ出來り、お鍋も店奥の境に立ちたり。折しも歸り來りし定二郎を見るより、勝之助は早くも聲を掛けたり。

『おい、定二郎、大變な事があるよ。』

『へい、何で御在ます。』

定二郎は頭から大變事ありと聞きて、驚きながら主人の前に坐りぬ。

『おい、番頭が殺されたぜ。横町の伊勢屋の番頭が。』

『えゝッ、常さんがですか。』

定二郎の顏色は見る〳〵中に土の如くなりぬ。之を見し勝之助はぎよッとして、屹と定二郎に目をつけたり。

（二十一）

三吉は主人の命を奉じて、既に淡路町の埼玉屋へ走り行きたり。勝之助はお濱に命じ、お鍋を伴ひて奥へ去らしめたり。後には勝之助と定二郎とのみなり。

勝之助は聲を潛めつ。

『定二郎、お前は如何思ふ。私は傳吉が……』

と、言葉を切りて、定二郎が顏をぢッと見れば、定二郎は顏色土の如くなりしのみならず、甚く畏怖を懷ける樣子なり。

『そ、そ、さうです。かも知れません。』

『まあ如何して殺す樣な氣になつたか知らん。』

『わ、わ、解りませんな。な、な、何しろ、た、た、大變です。』

定二郎が常藏殺されしと聞くより、其驚ける樣の勝之助が目に見ゆる程なると、應答の言葉の樣子、何となく落付かざるに、左る事はあるまじとは思へど、萬一定二郎が傳吉と共謀して、常藏を絞殺せしにはあらずや。一寸法師の樣なる傳吉が、大男の常藏を、おのれ一人の力にて殺し得べしとは思はれず、殊に一昨夜は何れへ泊りしか、定二郎家に在らざりき、一昨夜は卽ち常藏が殺されし夜なり、よし傳吉と共にせずとするも、何等かの關係なくては叶ひ難し、横濱の父病氣なりとて、昨夜我歸宅を待たずして出行きしが、其前に傳吉來りて、定二郎と何やらん密話き居りしとは、三吉が見たりとて我に告げし處なり、幸ひにして傳吉と共に自ら手は下さずとするも、

傳吉を欺き且つ敎唆し、手を下さしめしにはあらざるか、主人の妹其身の從妹を餌にして、傳吉を欺きし程の彼なればと勝之助は痛く心を勞し始めたり。

『定二郎、お前昨夜は何處へ泊んなすつた。』

『へい、昨晩は。あの、何です、横濱の宅へ泊りました。まだお詫も致しませんでしたが、昨晩はお留守に横濱へ參りまして、どうも恐入りまして御在ます。』

『それは能いとして、お前本當に横濱へ行きなすつたか。』

『へい、兩親からも宜しく申しました。なに、親父の病氣も大した事はありませんで、今朝私が歸ります時には、もう起きましてね、平生と些とも異らない樣になりました。卒中の樣な鹽梅で、一時は非常に驚きました。さうです、其から忘れて居りました、歸途に辨天通を通りますと、甲州屋さんで私を呼びまして、鳥渡頼みたいと云ひなつて、此お手紙を旦那へ……。』

定二郎は懷中より甲州屋が書狀を取出し、勝之助へ呈せしを手に取り上げ見れば、紛ふ方もなき甲州屋が手蹟、文言も覺えある事なりければ、先づは心安しと、勝之助

は覺えず胸を撫で下しぬ。

折柄三吉歸り來りぬ。埼玉屋が樣子を問へば、傳吉は留守にして、傳吉が母は何事のあればにや、目を泣腫らし居れりと云ふ。此にて、勝之助は、常藏殺害の下手人は傳吉に相違あらじと思ひ定めぬ。且つ定二郎三吉等を戒め、自然探偵來ることあるやも測り難かりければ、其節は一通り傳吉に就いて、知れる處は隱す事なかれ、されども、此方より賢ら立ちて、推測の陳述を爲すべからずと、堅く云ひ渡したり。

斯くて其日も黃昏近くなりたれども、幸ひに探偵は來らざりき。勝之助は稍心落着き奥へ入らんとせし時、郵便配達二通の書狀を投込み走り去りたり。定二郎は書狀を手に取りあげ、表書を見るより顏色驚き、電光の如く一通を袖にし、一通は仁壽堂宛なれば、之を勝之助へ呈したり。勝之助は定二郎が擧動に、又もや心安からず思ひ惑ひぬ。

（二十二）

定二郎が横濱へ行きたりし事の僞言ならざるは、甲州屋が手蹟にも知られたれど、平生に異りて顏色の惡き、溜息をつきがちなる、店の客にも怖るゝ氣勢、心地惡しとて食の進まざるなど、勝之助のみにはあらず、お濱が目にも付きて、如何にせしにやと兄に問ふ程なれば、勝之助は傳吉に關係なしとは信じながらも、尙ほ心安からざりしに、夕刻の怪しき書狀は、又もや疑念を生ぜしめたり。

其夜仁壽堂は平生よりも早く店を閉め、十時前に何れも床に入りたり。勝之助は床に入りたれども、傳吉が事より定二郎へ關りたる痛心と、傳吉が上の氣に掛るとの二つに、容易くは夢も結び難し。十二時も聞きたり。枕頭の時計の針は一時を指さんとすれども、眼は愈よ冴えて、妄想は縱横に走り廻る。傳吉が上は詮なけれど、定二郎は其身の從弟にして、彼が兩親、我爲めには叔父叔母より賴まれたるに、其甲斐もなく重罪を犯せしとありては、何とか申譯を爲すべき。甲州屋の書狀もあり、昨夜は横濱に相違なけれど、一昨夜は何れへか泊りたる。殊に怪しむべきは夕刻の手紙なり。傳吉からの手紙にてはあるまじきか。傳吉のならば、先づ常藏の下手人と決りたる

に、其書狀を受くべき筈なく、又我に隱すべき道理もなし。唯々願ふ所は、傳吉が犯罪に關係せざる事なり。

勝之助と一室を隔てたる定二郎も亦寢られざるにや、轉輾反側溜息をのみつきけるが、勝之助の耳に入れば、勝之助は愈よ疑念を增長して、尙も樣子を窺ひたり。

二時過ぎしかと思ふ頃、店の方に當りて、硝子と硝子とを觸れしむる音の聞ゆるに、勝之助は愕然として床を出でたり。察する處、定二郎彼犯罪事件に關係し、其露見を怖れて、毒藥を服むにはあらずやとの想像は、電光の如く勝之助の腦裡に閃きたり。足音を忍び、密に店を窺へば、定二郎が調藥臺の前に立ち、片手には水杯片手には壜を持ちて、戰慄ひつゝ篩がんとせる姿の、心を細めし洋燈の光明の朦朧たる中に見られたり。

『定二郎』

『ヘッ。』

定二郎は吃驚して、覺えず手にせし水杯を取落し、勝之助を見返りし眼は輝き、身

體は戰慄せり。

『あゝ、吃驚しました。』

『お前よりも、私の方が餘程吃驚した。何を爲て居るのだ。其壜を此方へ渡しなさい。』

『へい。』

勝之助は定二郎が手より壜を奪ひ取り、透し見るに、思ひしよりは壜も大きく、毒藥にはあらずして亞爾固爾なりき。此に少しは心を安んじ、定二郎を我寢所へ伴ひ來りぬ。

『定二郎、悉皆打明けて云ふが能い。私が惡い樣には計はない。亞爾固爾なんぞを何にするのだ。』

『へい、餘り寢られませんものですから。』

『なぜ其樣に寢られないんだ。何か仔細があるだらう。今も云ふ通り、私に悉皆打明けるが能い、決して惡くは計はない。』

『へい。斯うなりやもう悉皆申します。私や飛んでもない事を爲ました。

『伊勢屋の番頭を、傳吉と一處に殺したんだらう。』

『えッ、どうしまして。私が、何で、其樣、串戲を仰有つちや困ります。他人でも聞かうものなら大變です。今お話し申します。今ッ。』

定二郎が横濱へ行きしは實事なれども、父の急病と云へるは根もなき謊言なりき。彼が横濱へ行きしは傳吉に誘ばれしにて、昨夜は横濱の遊女屋に一夜の夢を結びしなりき。常藏殺害の一條は、彼は夢にも知らざる事にて、今日しも仁壽堂に歸り來り、始めて之を知りしなりき。彼が面色土の如くなりしは、殺人犯の傳吉と共に一夜を遊びたるより、連坐の憂目を見んことを怖るゝが故、お濱の一條欺かれたるを覺らば、彼我を恨むの餘り、連坐を負はせんことを怖るゝが故、彼に百金近き借財あれば、何とやら、心穩かならず、一念我を恨むに至らば、其等を種に連坐せられんことを怖るゝが故なりしとぞ云ふなる。

定二郎は語り終りて、尙ほ戰々兢々たれども、勝之助は漸く心を安んじたり。

彼怪しき書狀はと問へば、昨夜の横濱の遊女からなりと云ふ。馴染かと問へば、初會なりと答へ、傳吉と共に今朝遊女屋を立出でしかと問へば、彼は後へ流連りたりと答ふ。且つ遊女よりの文の樣子は、昨夜のお連樣、頻りにお前樣を待たせたまへば、初めての御見のお馴染は薄けれども、取敢ずお迎までにと書きたり。

勝之助は少時思案せしが、前後の樣子に想像を加へて、傳吉は横濱にて多くは既に捕縛せられしならんと覺りぬ。遊女よりの文は餌にして、定二郎を釣寄せんが爲めなるべしと覺りぬ。思ふ所を定二郎に申聞け、身に犯せし罪なければ、彼方の餌に釣られて、夜明けなば一番汽車にて横濱へ下り、昨夜の遊女屋へ到り見よ、其座にて多くは拘引せらるべし、拘引せらるゝとも、少しも恐るゝ所なければ、有體に陳述せよ、さあらば、仔細なく無罪の放免を得べしと教へ、定二郎が怖ろしさに進まざるを諭して自身新橋迄見送り、一番汽車にて横濱へ下らせたり。

（二十三）

勝之助は定二郎を横濱へ遣はし置き、新橋よりの歸途、埼玉屋の樣子尙ほ氣遣はしければと、反對の軒下を通り見るに、店は平常の如く開かれ、別に異りし樣子なし。既に通拔けんとせし時、小僧の長太郎走り來りて、宅のお神さんがお目に掛りたければ、お手間は取らせませぬ、鳥渡お立寄を願ひまするとの口上に、流石に見捨てかねて、進まぬながら其が店先へ到れば、傳吉が母は早くも出迎へ、先づ〳〵と請ずるに、店先へ腰を掛くれば、何卒此方へと云ふ。詮方なく奥へ通れば、傳吉が母は挨拶するより先づ、涙はら〳〵と落しぬ。

『貴所、もう心配な事が出來まして、私は如何致さうかと存じます。銀座の本店の方へ相談に參らうかと存じますけれども、長太郎ばかりで留守が御在ませんから、其も出來ませんので。貴所一昨々日から私一人で氣を揉んで居るもので御在ますから、もう貴所唯わく〳〵致しますばかりで。』

傳吉が母涙を拭へば、勝之助は道理なりと思ひながら、其と指しては云ひ難く、態と素知らぬ顏。

『其はまア嘸ぞ御心配な事で。傳吉さんは如何なすつたのです。』

『へい、傳吉が居りますれば、此程までに心配は致しませんけれども、如何致したので御在ますか、一昨々日出まして、何處に何を致して居るので御在ますか、まだ歸宅らないので御在ますよ。まア之を御覽なすつて下さいまし。』

傳吉が母は勝之助が前へ書付を出したり。勝之助は傳吉が母の言葉に、常藏一件は未だ知らざる事を知り、件の書付を見るに、高利貸の竹村より傳吉に係る、家屋抵當貸金支拂の命令書なり。

『貴所、其樣お書付が裁判所から。まア可怖いぢや御在ませんか、裁判所から其樣書付が參つたので御在ますよ。私には如何して能う御在ますか、女の事で些とも解らないので、實に當惑して居るので御在ますよ。餘り失禮では御在ましたけれども、貴所のお通りなさいますのを、お見掛申しましたものですから、御無理に御立寄を願ひまして、誠に濟みませんで御在ます。』

勝之助は此にて傳吉が金の入用を知り得たれど、傳吉の母が相談に對しては、如何

とも口の出し様なし。家は怖るべき命令書に接し、子は人を殺めて、既に死地に就けるに、其を知らずして尙ほ頼みとせる親心、察し遣りては胸も痛めど、懋ひに關係ひてはと、勝之助は命令書の意義を說聞かせ、一日も早く其手續を付けられるべし、傳吉殿留守なれば、今日にも本店へ相談されよ、命令書の期限内に先方との折合さへ付けば、何の仔細もあるまじければと慰め置き、辭し去らんとすれば、店口へ送り出でたる傳吉が母。

『どうも難有う御在ました。若し傳吉にお逢ひでもなさいましたら、どうか直きに歸宅ります樣に仰有つて下さいまし。彼樣事が御在ますのに、一昨日から昨日の午時頃までは、入替り立替り傳吉を尋ねてお出での方は御在ますし、今日は未だ何人もお出でなさいませんけれども、實に困るので御在ますよ。』

『へい。傳さんにお目に掛つたら、能うくさう申しませう。餘り御心配なさらないが能う御在ます。』

勝之助は傳吉が母を慰め置き、我家へ歸り來り、お濱を招きて、定二郎を横濱へ遣はせし始終、傳吉が母の不便なる事ども、私に語り聞かすれば、お濱は傳吉が殺せしかと思へば、彼が姿の眼の前に隱尾く樣覺えて、怖ろしき身に染渡り、傳吉が母の心を察すれば、氣の毒さに涙ぐまるゝ。

（二十四）

其日は定二郎終に歸らざれば、勝之助は果して我推量に違はず、定二郎は拘引せられしなるべし、拘引せらるればとて、殺害事件にさへ關係なくば、明日にも放免せられて歸り來るべし、左まで心配するには及ばねども、定二郎が自分へ云へし處と、其實際とに相違あらば、其罪は脫れ難し、此期に臨んで僞言を吐ふまじとは思へど、人の心の測り難きに、兎角一兩日待ちての上と、尙ほ安からざる思をなす。

次の日も勝之助はお濱と共に定二郎が噂に暮せし夕刻、定二郎歸り來りぬ。唯今歸りましたと云ふ聲、顏付に勇みあれば、勝之助もお濱も共に打喜びて出迎へ、奥へ伴ひ行き、叉手樣子はと問初めぬ。

『旦那の仰有つた通りで御在ました。遊女屋へ入らうと爲ますとね、前から網を張つて居ましてね、變な男がずつと私の傍に寄つて來ましてね、お前は定二郎と云ふ人だらうと云ひますから、さうですと云ひますとね、御用だと云つて、何時の間に掛けたんですか、ぐッと引張るから、見ると手に繩が掛つてるんです。』

『さうだつたらう。さうだつたらうとも。』

『嘸ぞ可怖かつたでせうねえ。』

『えゝ、覺悟して行つたんですけれども、何とも云へない可厭な心持が爲ました。』

『さうだつたらうねえ。』

『其から横濱の警察へ連れて行かれますとね、東京の探偵が出張して居ましてね、其探偵に引渡されて、東京へ送られたんです。横濱には私の家があるんでせう。親類もあれば、朋友も澤山あるんでせう。白晝腰繩で連れてかれるんですから、私や實に死んで仕舞ひたくなりました。探偵に賴んで頰冠を爲て貰ひました。』

『まア可愛想に。』

『身から出た錆だから爲方がないさ。それで何かい、伊勢屋の番頭を殺したのは、矢張傳吉だつたのかい。』

『え、さうなんで。東京へ送られてから調べられたんですがね、私の居た所と羽目一重でしたから能うく聞えました。私や實に驚いて仕舞ひましたよ。べら〳〵と平氣で、悉皆白狀つたんです。私や實に驚いちやッた。』

『さうか。其から如何だつた。』

『今話します。伊勢屋の番頭さんを、吉原田甫へ引張出して絞殺したんですとさ。搔撮んで手取早く話しますとね――種々な事を云つたんですけれども、聞えなかつた處もあるし――金故に常さんを殺したんですッて。彼高利貸の竹村、御存じでせう、彼竹村へ家を抵當に入れて置いた處が、期限が來ても金の的がないもんだから、伊勢屋の番頭さんに話して、貸して貰ふ事になつたんですが、證人がないんです。常さんが仁壽堂の旦那が判を押して下されば と云つたので、傳さんは仁壽堂の旦那に賴むから と云つて、彼日常さんを引張出したんですつて。實は彼前の晩に、旦那に賴んで呉れ

ろつて、私は頼まれたんです。』

『さうだつたのか。それならば兎も角も私に話せば能いのに、何とか仕様があつたらうのに。』

『さうは思つたんですけれども、其晩には遅く歸つてお出でなすつたし、次の日には傳さんの事で、旦那に小言を聞きましたし、お話する間がなかつたんです。其前の日の夕方と、其の日の午時頃傳さんが來たのは、其事をお頼み申す筈だつたんですッて。所が其機會がなかつた中に、竹村に出會して漸と竹村に話をして、其晩の十二時迄猶餘して貰ふ事にして、竹村と別れた處に、常藏さんが來て仁壽堂さんへ行かうと云ふのを、まだ旦那に話は爲てないし、仕方がないから、旦那も後からお出でなさる筈だからッてと、常さんを欺して、連雀町の安會席へ連込んだんですッて。其料理屋で常藏さんが醉つた紛れに、胴卷を出して傳さんに見せたさうです。傳さんが其を見るてえと、魔がさしたんですッて。調べられてさう云ひましたよ、其から急に其金が欲しくなつたのを、常藏さんが覺つた樣だから、無理に酒を進めて醉はせて、送る積

りで人車に乘せて、吉原に引込ませて、自分の馴染の樓に登つたんださうです。此馴染の樓から足がついたさうです。馴染の樓に行く奴があるもんですか。此が全く魔がさしたんですねえ。其から其樓で又醉はせて、吉原田甫へ引張出して、常藏さんが小水をして居る所を、田甫へ陷ちると危險からッて、押へて遣る積りで、背後から手拭で絞殺したんですッて。役人が其方の樣な小男が、一人の力では中々人は殺せない、何者が手傳つた者があるだらうと尋ねますとね、いえ私一人です、ぐッと締めると、ぼた〳〵と手足を動かしたと思ふと直きに倒れました、人間は此樣に脆弱いものとは思はなかつたと云ひましたよ。私や實に驚いちまッた。どうも實に驚きましたよ。旦那人間は其樣に脆いものですかねえ。』

『私が知るものかね。脆いか脆くないか、人を殺した事がありや爲まいし。串戲云つちゃ不可いぜ。』

『まア可怖いことね。まア其樣可怖い人だつたのかねえ。』

『お[illegible]さん、傳さんは貴女に餘ぽど氣が殘つてるんですよ。貴女の事も云ひました

よ。』

お濱は慄然として、兄が傍へ身を寄せたり。

『えッ、私の事を、まア如何したら能いだらうねえ。』

（二十五）

勝之助は妹お濱の事を、此期に至りても、傳吉が尙ほ口にしたりと聞くより、呆れながらも定二郎が傍へ膝を進めつ。

『何だと、傳吉がお濱の事を云つたッて。役人の前でかね。』

『えゝ、白洲でゝす。私が惡いのです。私が好い加減な事を云つて、傳さんを欺したのは、私が一生の過失でした。何卒勘忍して下さいまし。傳さんが白洲で云ひますにはね、私は人を殺したのですから、大罪を犯したのですから、どんな御處刑でも受けます、併し、私は心に掛るものがあります、私のお袋と、私の……女房とはなつてゐないけれども、約束をしてあるお濱と云ふ娘があります、私は罪

人ですが、お袋は何にも存じません、私は身を八裂にされても、お袋やお濱にはお祟りのない樣に願ひます、お慈悲を願ひますッて、幾度もさう云ひましたよ。其でね、役人が、其方の母や妻となるべき女が、情を知つて居るのでなければ、問ふべき罪がないのだから、其樣心配は致さんが能いと、云つて聞かせましたね、難有う御在ますつてね、結局泣出してね、白洲でおいおい泣くんですよ。私もね、餘り可哀想で、私も泣きました。』

『まア其樣に傳さんが……。』

お濱は甚く感動して、襦袢の袖にて涙を押ふれば、勝之助も傳吉が心中の氣の毒さに、垂頭いて歎息しつゝ、少時は言葉も出でざりき。

『旦那、傳さんが此樣事になつたのも、原因はと云へば、悉皆私から起つたのです。私が能い加減な事を云はなければ……。私が傳さんを罪人にしたのも同樣です。』

定二郎は此迄勝之助へ隱し居りし、傳吉を吉原へ誘ひ出せし初めより、其後もお濱

を餌にして彼を欺き、彼の金に我樂みを盡せし事、百圓近き金を借出せし事、斯かる事より傳吉金に詰りて、家屋を抵當にせし事情を、いと委しく述べ終り、傳吉が常藏を殺せしは、其金を奪ひて、家屋を抵當より救はんとせしにて、家屋を救はんとせしは、母に心配を掛けざらんが爲め、お濱に愛想を盡かされざらんが爲めなり、傳吉が斯く迄心を惱まし、其身を忘るゝに到りし家屋は、われ勸めて抵當に入れしめしに等しく、われ常藏を殺せしに等しく、われ傳吉を殺さんとするに等し、されど事此に到りては、如何とも詮方なければ、世にも頼りなき傳吉が母を、我母としても思ひて養ひ慰めんと、涙と共に云出でぬ。

勝之助もお濱も共に定二郎が改心を喜び、哀れなる傳吉が母に就いては、力の許す限り共々慰め遣らんと約し、中にもお濱は今日より我家へ引取りてと迄云ふを、勝之助は傳吉が事落着迄は情なきに似たれど、關係せざるこそ能けれ、傳吉が心を留せる家屋は、私かに竹村へ相談して、此方へ取止むる手段あらんと云へば、お濱は、成る事ならば、一日も早くさうして上げて下されと云ふ。萬事は私に委せ置くべしとの勝之助が言葉に、定二郎も甚く打喜びぬ。

定二郎は俄かに思出せしにや、お濱に對ひて、

『此樣事を云ひますと、お濱さんも能い心持は爲ますまいが、傳さんが白洲から出て來た時に、私に顏を合せると、差入物を、何卒お濱さんにと、たつた一言云つたんです。誠に濟みませんが。お濱さんのお名を貸して下さいまし、明日にも私が行つて來ますから。』

『其樣にまで、私の事を思つてお居でなのかねえ。兄さん、能う御在ませうね、明日にも定さんに行つて貰つて。』

『能かろ、併し、世間には知れない樣に爲たいものだ。定二郎、お前能く心得てな。』

『へい。承知致しました。』

次の日朝疾く、定二郎は監獄署へ行き、お濱の名をもて、傳吉へ半紙幾帖かを差入れたり。之を手にせし時の傳吉は嬉泣きに泣いたと云ふ。

斯くて間もなく、傳吉は絞罪となりぬ。

傳吉が母は、傳吉が犯罪の一條を聞きし時は、殆んど狂せんばかりに歎きけるを、定二郎日毎に訪ねて慰め居たりしに、愈よ絞罪に處せられしと聞きては、共に死なんと歎きしを、仁壽堂の勝之助お濱共々に力をつけ、心の限り慰め遣り、後には我方へ引取り世話しけるに、お濱が本町の親戚へ歸嫁ぎて間もなく、二三日の病氣に、姥櫻の敢なく枯れて、空しく恨のみを殘しけるこそ哀れなれ。

改造文庫　第二部　第百五十五篇
今戸心中　定價三十錢
著者　廣津柳浪
發行者　山本三生　東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地
印刷者　杉山愛二　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
昭和六年六月十五日印刷
昭和六年六月二十三日發行
版權所有
（長谷部製本）
發兌　改造社　東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地　振替口座東京八四〇二番　電話芝(43)自一一二一番至一一二四番
株式會社秀英舍印刷

我社は世界に於ける出版界の革命者である。廉價全集の創始者である。我社が大正十五年十一月多大の犧牲を豫期して廉價全集を發行するや、感激の聲國内を震撼し、日々數千通の感謝狀が舞ひ込んだ。今迄特權階級のみの藝術であり、哲學であり、經濟、美術、科學であつたものが無產階級の全野に解放されてからは全國を通じて讀書階級が一時に數十倍となつた。この劃期的現象を招來し、我國の文化を一時に引上げ文化史上赫々たる我社は、尙當時の宣言の徹底を期して玆に「改造文庫」を發刊せんとす。尙その內容は別記の如くであるが、我社は數十年を期してあらゆる權威ある著作を本集に網羅して民衆的一大文庫を建設せんと欲す。諸君の期待と支持を俟つ。

□此の文庫は、內容嚴選と最低の廉價とを以て第一義とし、專ら大衆普及を目的として刊行す。
□此の文庫に收容するものは、東西古今百般の書に亙り、校訂、註釋、飜譯、總て典據たるべきを期す。
□此の文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歷史、文學、藝術、美術等百般に及ぶ。
□表紙上の番號は單に發行順を示すものなれど、將來檢索上の便宜を考慮に容れて之を示す。
□一冊の分量は約百頁以上五百頁とし定價は約百頁を單位として拾錢としその冊子の頁に應じて二十錢、三十錢、四十錢、五十錢とす。但、地圖附錄等挿入の場合は、必らずしもこの例に依らず。
□表紙意匠中、1は十錢を、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。
□定價及び送料左表の如し。

表紙背の符號	1	2	3	4	5	6	7	8
定價(錢)	一〇	二〇	三〇	四〇	五〇	六〇	七〇	八〇
送料(錢)	二	四	六	八	一〇	一二	一四	一六

改造文庫第一部目錄

第一篇 富國論(上卷) アダム・スミス著 8
第二篇 富國論(中卷) アダム・スミス著 (刊近)
第三篇 富國論(下卷) アダム・スミス著 (刊近)
第四篇 人口論 ロバート・マルサス著 (刊近)
第五篇 經濟學原理 デヰド・リカアド著 (刊近)
第六篇 經濟學原理(上卷) スチユアト・ミル著 (刊近)
第七篇 經濟學原理(下卷) スチユアト・ミル著 (刊近)
第八篇 經濟學方法論 カール・メンガー著 (刊近)
第九篇 經濟學原理 チエボンス著 (刊近)
第一〇篇 社會主義の發展 エンゲルス著 堺利彥譯 1
第一一篇 マルキシズム認識論 デイツゲン著 石川準十郎譯 1
第一二篇 辯證法的唯物觀 デイツゲン著 山川均譯 2
第一三篇 哲學の實果 デイツゲン著 山川均譯 1
第一四篇 神と國家 バクーニン著 本莊可宗譯 1
第一五篇 婦人論 ベーベル著 山川菊榮譯 6
第一六篇 古代社會(上卷) モルガン著 荒畑寒村譯 5
第一七篇 古代社會(下卷) モルガン著 荒畑寒村譯 (刊近)
第一八篇 エミール(上卷) ルソー著 內山賢次譯 4
第一九篇 エミール(下卷) ルソー著 內山賢次譯 4
第二〇篇 國家論 オツペンハイマー著 廣島定吉譯 2
第二一篇 金融資本論 猪俣津南雄著 4
第二二篇 日本開化小史 田口卯吉著 2
第二三篇 日本經濟論 田口卯吉著 1
第二四篇 日本經濟學說の要領 經濟的帝國論 瀧本誠一著 2
第二五篇 日本商業史 橫井時冬著 4
第二六篇 日本工業史 橫井時冬著 4
第二七篇 經濟學の實際知識 高橋龜吉著 2
第二八篇 リツケルト論文集 リツケルト著 2

第二九篇 フツサール論文集 フツサール著（近刊）
第三〇篇 女工哀史 細井和喜藏著 4
第三一篇 婦人解放論 スチュアト・ミル著（近刊）
第三二篇 社會進化と婦人の地位 ラツペポート著 山川菊榮譯 2
第三三篇 共産主義小兒病 レーニン著（近刊）
第三四篇 二十世紀初頭の農村問題 レーニン著（近刊）
第三五篇 文學と革命 トロツキー著（近刊）
第三六篇 幸德秋水集 幸德秋水著 2
第三七篇 中江兆民集 中江兆民著 2
第三八篇 財産起源論 レヴインスキー著 貴島克己譯 1
第三九篇 組織論 鈴木レーニン著 厚譯 3
第四〇篇 三民主義 孫中山著 金井寛三譯 3
第四一篇 唯一者とその所有 マヴクス・スティルネル著 辻潤譯 6
第四二篇 世事見聞錄 武陽隱士著 本庄榮治郎校訂 4
第四三篇 金融資本論 全譯 ヒルファディング著 林要譯 7
第四四篇 近世封建社會の研究 木庄榮治郎著 2
第四五篇 我國近世の農村問題 木庄榮治郎著 3
第四六篇 マルクスの歴史、社會並に國家理論（上卷） ハインリツヒ・クノー著 鳥海森谷濱島共譯（近刊）
第四七篇 マルクスの歴史、社會並に國家理論（下卷） ハインリツヒ・クノー著 鳥海森谷濱島共譯 7
第四八篇 マルキシズム國家觀 マツクス・アドラー著 山本琴譯 5
第四九篇 マルクス主義經濟學 河上肇著 3
第五〇篇 哲學概說 桑木嚴翼著 3
第五一篇 現代哲學思潮 桑木嚴翼著 3
第五三篇 カントの平和論 朝永三十郎著 2
第五八篇 天才論 ロンブロオゾオ著 辻潤譯 5
第五九篇 佛蘭西革命史 上 クロポトキン著 淡徳三郎譯 5
第六〇篇 佛蘭西革命史 下 クロポトキン著 淡徳三郎譯 5
第六一篇 無政府主義と社會主義 プレカアノフ著 百瀨二郎譯 2
第六二篇 財産進化論 ラフワルグ著 荒畑寒村譯 2
第六三篇 帝國主義論 レーニン著 岡田宗司譯 3
第六四篇 帝國主義論 ホブソン著 石澤新二譯 5
第六五篇 勞働價値說の擁護 ヒルファディンゲ著 塚本三吉譯 2

第六六篇 經濟地理概論 ブレブス・リーゲ編 菊川忠雄譯 3
第六七篇 帝國主義發達史論 プレブス編 内田佐久郎譯 3
第六八篇 プレブス經濟學 ブレブス・リーゲ編 田所輝明譯 3
第六九篇 心理學概論 プレブス編 小宮義孝譯 3
第七〇篇 社會意識學概論 ボグダーノフ著 林髮雄譯 4
第七一篇 經濟科學概論 ボグダーノフ著 林髮雄 木村恭一譯 5
第七六篇 倫理と唯物史觀 カール・カウツキー著 堺利彦譯 2
第七七篇 社會進化と生物進化 アーサー・リユキス著 荒畑寒村譯 2
第七九篇 唯物論と經驗批判論（上） レーニン著 山川・大森譯 4
第八〇篇 唯物論と經驗批判論（下） レーニン著 山川・大森譯 4
第八四篇 阿片溺愛者の告白 デ・クインシイ著 辻潤譯 2
第一〇三篇 經濟學史の基礎概念 住谷悅治著 5
第一〇五篇 エルフエルト綱領解說 カール・カウツキー著 三輪壽莊譯 3
第一〇六篇 マルクス經濟學大綱 ボルハルト著 田中九一譯 2

——以下續刊——

改造文庫第二部目錄

第一篇 古事記 澤瀉久孝校訂 (刊近)
第二篇 萬葉集(上卷) 折口信夫校訂 (刊近)
第三篇 萬葉集(下卷) 折口信夫校訂 (刊近)
第四篇 古今集 吉澤義則校註 (刊近)
第五篇 新古今集 吉澤義則校註 (刊近)
第六篇 新編源氏物語(上卷) 折口信夫校註 (刊近)
第七篇 新編源氏物語(下卷) 折口信夫校註 (刊近)
第八篇 枕草紙 山岸德平校訂 (刊近)
第九篇 金槐集 幸田露伴校註 (刊近)
第一〇篇 平家物語 (刊近)
第一一篇 雨月物語 山口剛校訂 (刊近)
第一二篇 山家集 齋藤茂吉校註 (刊近)
第一三篇 俳諧七部集 萩原蘿月校訂 3
第一四篇 蕪村七部集 萩原蘿月校訂 3
第一五篇 伊勢物語 久松潛一校訂 2
第一六篇 神皇正統記 宮地直一校註 3
第一七篇 奥の細道 芭蕉翁文集 萩原蘿月校訂 3
第一八篇 曾根崎心中 心中天の網島 女殺油地獄 黑木勘藏校註 3
第一九篇 冥途飛脚 黑木勘藏校註 (刊近)
第二〇篇 國姓爺合戰 黑木勘藏校註 (刊近)
第二一篇 槍權三重帷子 夕霧阿波鳴門 黑木勘藏校註 (刊近)
第二二篇 心中重井筒 丹波與作 黑木勘藏校註 (刊近)
第二三篇 山崎與次兵衛壽門松、心中宵庚申 黑木勘藏校註 (刊近)
第二四篇 傾城反魂香 黑木勘藏校註 (刊近)
第二五篇 淀鯉出世瀧徳 長町女腹切 黑木勘藏校註 (刊近)
第二六篇 博多小女郎波枕 堀川波鼓 黑木勘藏校註 (刊近)
第二七篇 五十年忌歌念佛 大經師昔暦 黑木勘藏校註 (刊近)
第二八篇 菅原傳受手習鑑 假名手本忠臣藏 黑本勘藏校註 (刊近)
第二九篇 八百屋お七歌祭文 お染久松袂の白絞り 黑木勘藏校註 (刊近)
第三〇篇 伊賀越道中双六 一谷嫩軍記 黑木勘藏校註 (刊近)
第三一篇 大鏡 吉澤義則校註 (刊近)
第三二篇 徒然草 吉澤義則校註 (刊近)
第三三篇 日蓮上人集 (刊近)
第三四篇 親鸞上人集 島崎藤村編 1
第三五篇 北村透谷選集 樋口一葉著 1
第三六篇 樋口一葉選集 凡二葉亭主人著 1
第三七篇 平規俳話 正岡子規著 3
第三八篇 子規論歌話 正岡子規著 3
第三九篇 子規歌論歌話 正岡子規著 3
第四〇篇 坊つちやん 夏目漱石著 2
第四一篇 草枕 夏目漱石著 2
第四二篇 それから 夏目漱石著 3
第四三篇 一握の砂 悲しき玩具 石川啄木著 2
第四四篇 我等の一團と彼 雲は天才である 石川啄木著 1
第四五篇 山陰土產その他 島崎藤村著 2
第四六篇 民謠集 作曲白秋 北原白秋著 2
第四七篇 中記 獄 オスカア・ワイルド著 神近市子譯 2
第四八篇 厭世家の誕生日 佐藤春夫著 1
第四九篇 日輪 横光利一著 1
第五〇篇 勞働者の居ない船 葉山嘉樹著 1
第五一篇 海に生くる人々 葉山嘉樹著 2
第五二篇 小公子 バアネット著 若松賤子譯 2
第五三篇 ホワイト・ファング ジャック・ロンドン著 堺利彥譯 3
第五四篇 はやり唄 小杉天外著 3
第五五篇 朝の螢 自選歌集 齋藤茂吉著 2
第五六篇 十年 自選歌集 島木赤彥著 2
第五七篇 川のほとり 自選歌集 古泉千樫著 2
第五八篇 松の芽 自選歌集 中村憲吉著 2

第五九篇 自選歌集 海やまのあひだ 釋迦堂著 4
第六〇篇 自選歌集 立春 木下利玄著 2
第六一篇 自選歌集 花樫 北原白秋著 3
第六二篇 自選歌集 人間往來 與謝野晶子著 2
第六三篇 自選歌集 槻の木 窪田空穂著 2
第六四篇 自選歌集 野原の郭公 若山牧水著 2
第六五篇 自選歌集 原生林 前田夕暮著 3
第六六篇 自選集 空を仰ぐ 土岐善麿著 2
第六七篇 作曲白秋作 童謡集 北原白秋著 2
第六八篇 作曲白秋作 國民歌謡集 北原白秋著 2
第六九篇 作曲白秋 舞踊詞集 北原白秋著 2
第七〇篇 背徳者 アンドレ・ジッド著 石川淳譯 2
第七一篇 チェホフ書簡集 内山賢次譯 5
第七六篇 愚庵歌集 齋藤茂吉編 (刊近)
第七七篇 芭蕉遺語集 荻原井泉水校訂 (刊近)
第七八篇 一茶七番日記(上卷) 荻原井泉水校訂 4
第七九篇 一茶七番日記(下卷) 荻原井泉水校訂 4
第八〇篇 おらが春 荻原井泉水校訂 (刊近)
第八二篇 新花つみ(蘇村日記) 荻原井泉水編 (刊近)
第八八篇 寡婦マルタ エリイザ・オルゼシュコ著 清見睦郎譯 3
第八九篇 句集虚子 高濱虚子著 6
第九〇篇 井泉水句集 荻原井泉水著 5
第九一篇 サニン アルツイバーセフ著 武林無想庵譯 6
第九二篇 一青年の告白 ジョージ・ムーア著 辻潤譯 3
第九三篇 一週間 リベディンスキー著 池谷信三郎譯 2
第九四篇 室生犀星詩集 室生犀星著 5
第九五篇 千家元麿詩集 千家元麿著 3
第九六篇 横瀬夜雨詩集 横瀬夜雨著 5
第九七篇 修禪寺物語 岡本綺堂著 3
第九八篇 少年の悲哀 國木田獨歩著 2
第九九篇 運命論者 國木田獨歩著 2
第一〇〇篇 愛慾 武者小路實篤著 2

第一〇一篇 作者別萬葉全集 土岐善麿編著 6
第一〇二篇 作者別萬葉以後 土岐善麿編著 (刊近)
第一〇五篇 佛蘭西家庭童話集(第一卷) ボーモン夫人著 長松英一譯 3
第一〇六篇 佛蘭西家庭童話集(第二卷) ドルノア夫人著 長松英一譯 5
第一一〇篇 巴里の憂鬱 シャルル・ボオドレエル著 三好達治譯 2
第一一二篇 死の舞踏 ストリンドベリイ著 山本有三譯 2
第一一三篇 奈落の人々 シャック・ロンドン著 和氣律次郎譯 3
第一一四篇 爭鬪 ジョン・コルスワオイル著 和氣律次郎譯 2
第一一五篇 無名作家の日記(三篇)(現代物1) 他廿(短篇小說篇) 菊池寛著 5
第一一六篇 出世 他廿(短篇小說篇)(七篇)(現代物2) 菊池寛著 4
第一一七篇 恩讐の彼方に 他廿(短篇小說)(八篇)(時代物) 菊池寛著 5
第一一八篇 噂の發生 他廿(短篇小說)(六篇)(集補遺) 菊池寛著 4
第一一九篇 父歸る 他廿(三篇)(戯曲篇)(現代物) 菊池寛著 5
第一二〇篇 藤十郎の戀 他十(戯曲篇)(九篇)(時代物) 菊池寛著 5
第一二一篇 眞珠夫人 菊池寛著 6
第一二二篇 慈悲心鳥 菊池寛著 4
第一二三篇 新珠 菊池寛著 5
第一二四篇 火華 菊池寛著 4
第一二五篇 受難華 菊池寛著 5
第一二六篇 赤い白鳥 菊池寛著 3
第一二七篇 明眸禍 菊池寛著 5
第一二八篇 新女性鑑 菊池寛著 3
第一二九篇 陸の人魚 菊池寛著 4
第一三〇篇 第二の接吻 菊池寛著 3
第一三一篇 東京行進曲 菊池寛著 3
第一三二篇 結婚二重奏 菊池寛著 3
第一三三篇 不壞の白珠 菊池寛著 3
(以上十九篇にて菊池寛全著作集完結)
第一四一篇 イブセン全集(一) 可野義博譯 永田衡吉譯 小寺融吉譯 3
第一四五篇 イブセン全集(五) 大山廣光譯 大關郁譯 中村柊吉譯 5

第一五一篇　ハイネ詩集（1）　ハイネ著　生田春月譯（刊近）

第一五二篇　ハイネ詩集（2）　ハイネ著　生田春月譯（刊近）

第一五三篇　ハイネ詩集（3）　ハイネ著　生田春月譯（刊近）

第一五四篇　洋服箪笥　トーマス・マン著　六笠武生譯　2

第一五五篇　今戸心中　廣津柳浪著　3

第一五六篇　嬰兒殺し　山本有三著　3

第一五七篇　芭蕉・夜船・草の詩　吉田絃二郎著　3

第一五九篇　新人國記　アナトール・フランス著　木村恭一譯　4

第一六〇篇　シラー詩集　小栗孝則著　4

第一六一篇　どつこいおいらは生きてゐる！　エルンスト・トラア著　潘木達譯　2

第一六二篇　獄窓から　和田久太郎著　5

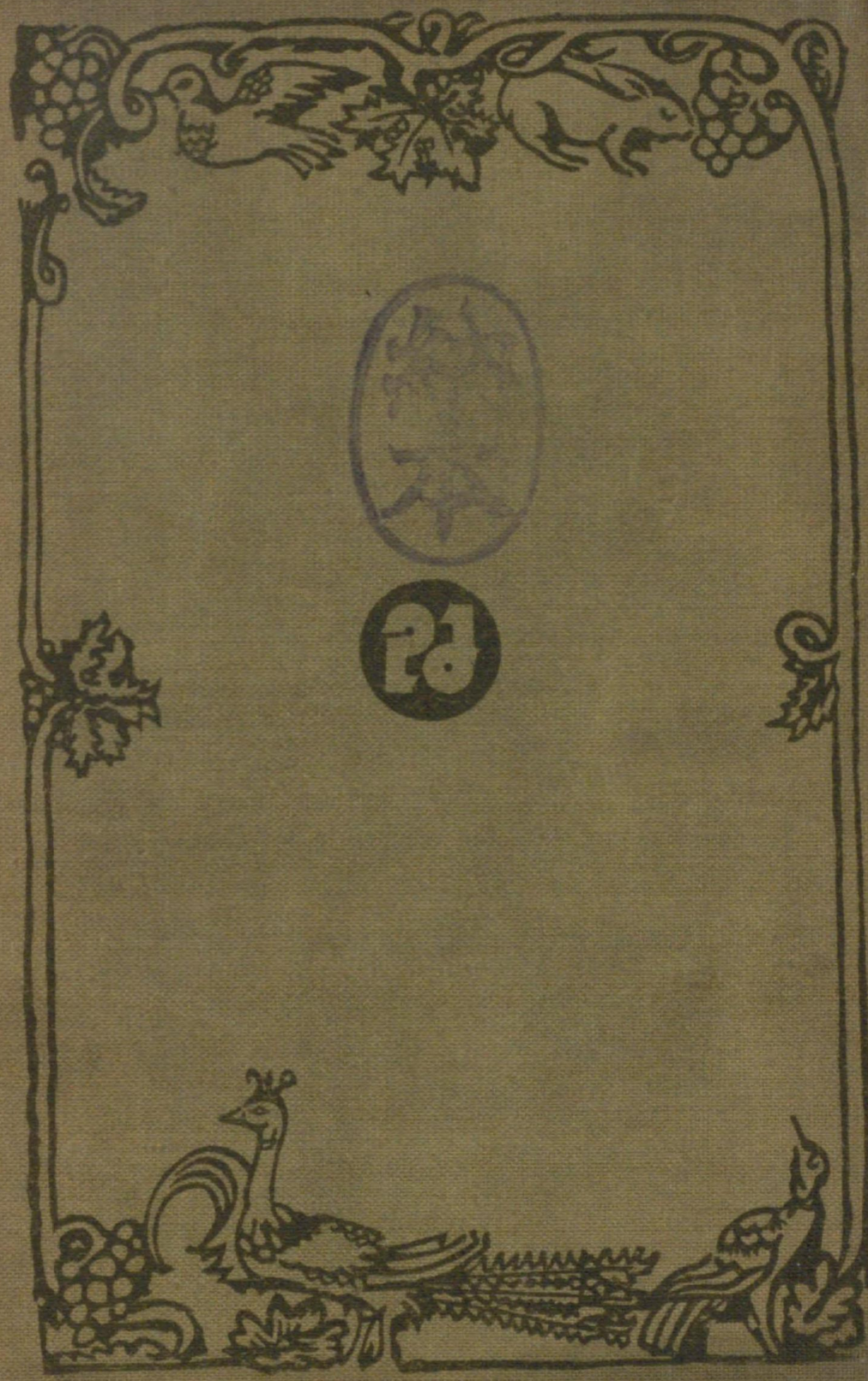
第一六三篇　人波　アルツイバアシエフ著　原久一郎譯　3

第一六四篇　結婚の悲劇　アルツイバアシエフ著　原久一郎譯　5

第一六五篇　苦難の路（上）　ア・トルストイ著　原久一郎譯　4

第一六六篇　苦難の路（下）　ア・トルストイ著　原久一郎譯（刊近）

第一六七篇　芭蕉書翰集　萩原藤月養（刊近）

——以下續刊——

569
142